

五九郎「國家と乎社會と乎言ふ立場から言ふならば各人が壯健の時に働いたならば病氣の際には休息して保養する丈の餘裕があり、若い時代に勤勉力行した者は老後の餘生を樂しむ事が出来る様な組織になつて居なければならん筈ですね。」

労働者「さうなつて居れば我々にも何等の苦情が無いのです、それが現在ではさうでありませぬ。壯健の時にやつと食ふ事が出来る丈で、病氣になつても一包の藥さへ飲む事が出来ません、醫學がいくら進歩してもどうせ見て貰ふ事が出来ないから私共には大昔と變りはありません、若い時いくら働いても、老衰すれば古靴同様に塵溜に野垂れ死する外途がないのでありますからなさけなくあります。」

三太郎「理想上から言へば人類は次第に發展すべき者であるから、夫婦二人あれば少くとも三人以上の子供を生む可き者、従つて夫婦の収入は自分等が生活した外に三人の子供を養育し得て、且老年の父母に孝養を盡し得る様な組織になつて居なければならんですね。」

労働者「吾々は老父母の事迄世話を焼かんでも差支ありませんが、兎に角一方には働かないでも使ひ切れない程の富を積んで、それがひとりで増加して行く現在の社會組織が癪にさわります。」

五九郎「子供が父母の事を世話焼かないとすれば、自分が老後の爲に貯蓄して置く必要がありませんから、經濟的關係から見れば同じ事です。」

四七 若婦人登山

森林を出でてフェルゼナウの高臺に昇ればユング・フラウ以下の高山は雲際に聳えて吾々を招くが如く、其容姿の艶麗なる誠に其名に脊かざる物がある。

三太郎「本當に佳い景色ですね。ユング・フラウと言ふ名は適して居るね、全く若い婦人の様に綺麗だから。」

労働者「ユング・フラウと云ふのは處女の事です、男と生れた甲斐には一命を捨て、も惜まないから、一度はあれに登つて見たいと思ふ心が誰にでも起るので、あの山をユング・フラウと呼ぶのださうです。」

五九郎「成る程、西洋人には西洋人らしい命名法があるんだね」

若婦人登山

他人の女房とあの山だけは

命かけならのほらんせ

と云ふ所ですわね。」

労働者「昔はユング・フラウに登るのは命がけであつたが、何でも金の世の中の今日では金さへ出せば簡単に事がすみます。」

三太郎「さうですか、金を出して無事に登れるなら一つ登つて見ようでないか。」

五九郎「昔から間男は七兩二分と相場がきまつて居るが、ユング・フラウだから慰籍料をいくら出せば良いのかね。」

命を投げ出してもと言ふ程ではないが、少しの旅費で登れるものなら兎に角一度は登つて見たいと云ふ念が起きたので、首府ベルンから汽車にて二時間走り、次に汽船に乗り換へて湖水面を縦横に馳する事更に二時間にしてインターラーケンに着いた。此處がユング・フラウへの登山口である、インターラーケンは其名の示す如く、チューン湖とブリエンツ湖とを聯結するアーレ河岸の小都會で人口約一萬、氣候溫和にして激變なきを以て有名なる避暑地である。老樹鬱蒼たる

へへ街道に出づれば夕陽に照らされたるユング・フラウ山の優姿は殊の外に眼立ちて吾を誘惑して居る。アーレ河の右岸にはハルダーと呼ばれる小山があり、名所の一つに數へられ、ブリエンツ街道の橋を渡り約五分間にして登山鐵道の出發點がある、全長僅かに一キロメートル半にも足らざる短距離ではあるが、百分の五十八と言ふ驚く可き急勾配であるから、鐵道と云ふよりも寧ろエレベーターと言つた方が適當かも知れん、事實に於て客車を鐵道で引き上げるのである。途中二百メートルのトンネルを潜りて終點驛に到れば、海拔千三百餘メートルで更に徒歩する事數分にして四千四百餘尺の地點にレストーランがある。ビールを命じ眼を下界に投げるとインターラーケンは言ふに及ばず、ブリエンツ湖やチューン湖の水は青く綠色を帯び、眼を轉じ天空を望めば、遙かにアルプスの連山其雄を競ひ、ユング・フラウは益々其高さを増して見える。

三太郎「日本に居た時は海拔三千七百餘メートルの富士山を眺めて高いと思つて居たのであるが、ユング・フラウは四千六百六十七メートルあると云ふから、富士山よりも更に千數百尺高い筈であるから驚くわね。」

五九郎「富士山の様には唯一つ丈飛び離れて高い山があるのも面白いが、ユング、フラウの様には前

後左右多くの高山に圍まれ乍ら、而も猶偉彩を放つて居るのは面白いですな。」

三太郎「ユング、フラウと云ふ名を直譯すれば若婦人となるが日本の富士山なども或は婦人山と云ふのが本當かも知れんね。」

五九郎「そんな事はあるまい、火の事を大和言葉ではヒ或はホと云ひ佛語では之をフと言ふが何でもフチと言ふ言葉は本來火地即ち火山と云ふ意味である、それを後世の人が縁起を尊ぶ迷信から不二と乎富士など云ふ字を當てたのであると云ふ説を聞いた事がありますよ。」

三太郎「それは故事付けではありませんか、

裾野から捲り上げたる婦人の山

甲斐で見るとより駿河まされり

と云ふ句がある如く其形の似た所から名を附けたのであると云ふ説もありますよ、若しさう云ふ風に富士でなく婦人であるとする、卷狩の際に何と乎云ふ勇士が奥迄這入り込で探検したと云ふ富士の人孔なども意味が違つて來るがね。」

五九郎「あれは何も不思議な事ではありません、火山爆發の際に押し出した熔岩が山腹を流れて

行く中に表面は外氣の寒冷に逢ふて早く固まつてしまふけれども、内部は何時迄も流體の儘で居るから勾配の急なる所では外皮丈が残つて内部は抜け出す事がある。それが即ち自然のトンネルの如き形となるのですから。」

更に頂上を指して登つて見るとタンネンの林があり、周圍十餘尺もあるべき老樹が到る處に倒れて居る。是が所謂天狗倒しと云ふ物であると推察された、倒れた大樹の根を見ると地中深く黄泉に達して居る午旁根は、よく四方に張りたる根も直径僅かに一二寸の物が數尺の距離に延び居るのみにて、且地盤は全部腐植土にて粘着力なく深さ約一尺内外の處に根は限られて居る。是では天狗の力を借らずとも倒れるのに無理はないと思はれた。

インタールレーケンからラウターブルンネンに到る十二キロメートル間の高地鐵道は百分の三十五の急勾配である。沿道からはユング・フラウは勿論メンヒやエツターホルン等の高峯が見える。八キロメートル進んだ處でユング・フラウ行とエツターホルン行と登山者は左右に分れる、ラウターブルンネン谷は樹木鬱蒼として三百乃至五百メートルの斷崖を成し、山間の小都會とも云ふべきラウターブルンネンに在りては四圍の山峰高く天に聳え七月と雖も猶朝の七時に非れば太陽

出でず、冬期に到れば十一時迄日の出を見る事が出来ないと言ふ話である。而して清水は到る處に湧出して真にラウター、ブルンネンの其名に背かざる物がある。右岸には高さ千尺の大瀧が懸りて凡て空中にて霧と化してしまふ奇觀を呈し、旭日の光を受けたる時若しくは明月の宵は殊の外壯觀極まりなき景を呈すると聞いた。

更に東に進めばユング・フラウの氷河が解けて流れ落つるトリユンメル・パツハの瀧が懸り日光を反射して不斷の虹を見せて居る。

ラウター・ブルンネンから東に進む三キロメートルにてエンゲン驛があり、七キロにてエンゲルンアルプ驛あり徒步者に對するユング、フラウ登山口である。三千七百メートルの銀峯を右に三千四百メートルの雪嶺を左にして其中央に若婦人が聳えて居る。直徑にして猶四キロメートルの距離であるが目睫の間に立てるが如く見えて居り、更に左の方には四千四百メートルの法師山や四千メートルのアイデルが連なつて居る。

ユング・フラウに初めて登山せるは千八百十一年マイヤー氏であるが、其後四十年間に登山せる事僅かに四回であるのを見れば如何に登山に伴ふ其困難の程度大なるかは想像が出来る。ユング・

フラウの容姿が如何に誘惑的であつても生命を賭して登山する氣には成れない。併し第二十世紀の有難さは、そんな危険を冒さずとも目的を達する事が出来る様に設備が完成されて居る。

エンゲルンアルプより二キロにしてシャイデツキ驛あり此處から分岐してユングフラウ線が布設されて居る。軌道は一メートルで勾配百分の二十五を有する電氣鐵道である。線路が多くトンネル内を通過するのみでなく、停車場さへも地中にあるので汽車では煙の爲に窒息する恐れがある、二キロメートルにしてアイゲル氷河驛がある、停車場は全然地中にあり岩石の割れ目より流れ出でたる清水は凡て氷結して恰も水晶宮に入りたるの觀がある。

停車場から右に向つて横孔を降り山腹に出て見ると、其處が即ち生れて初めて見る處の氷河である。軌道は更に彎曲限りなきトンネル内を進む事四キロにしてアイゲル、ワンド驛がある。一方切り開かれたる岩窟内にありて外界を眺望すればチューン湖を始め北部端西の大部分が眼前に展開され、自然のパノラマは思はず萬歳を唱えしめた、次は氷海驛である、萬古不滅の氷雪は山を成し海の如く見渡す限りは白皚々として一目銀世界とは誠に斯の如きの景にして言ひ得る物乎と思はしめた。盤岩を穿てる細きトンネルを傳はりて降り行けば、大氷河の河岸に出で更に氷河を涉り

乍ら登れば愉快の感と恐怖の念と交々に襲ひ來り、如何にもユング・フラウの名に背かざるを感じた。

四八 相對性原理

一昨年、日蝕の際に於ける觀測の結果として太陽の附近を過る星の光の行路が彎曲すると云ふアインスタインの結論が檢證せられたと出ふ事が公にせられて以來は、相對性理論が世界の流行物となり、新聞に雑誌に單行本に講演に、甚しきは活動寫眞や芝居に迄取り入れられて居り、アインスタインを口にせざれば人の前に出られない様な世界に變化して仕まつた。其アインスタインは此瑞西に居るのであるから相對性原理が期せずして話題になつた。尤も中には相對性理論と云ふのは男性と女性との相對的關係を理論物理學者が論究した物と早合點して、雑誌や單行本を買ひ込む者も尠くないと云ふ事であるが、まさか夫れ程でなくとも、東北の或田舎村から依頼されて東北大學の某助教授が相對性原理の通俗講演をやつたが、其後の批評を聞くと、大學の先生なんと云ふ者は一寸した事でも六か敷く話をする者だ、今日の講演などはてんで解らないが、

要するにアインスタインの相對性と云ふのはアヒタイかシタイ乎と言ふ事を説いて居る丈だらう、夫れを誰にも解る様に話をすれば風俗懷亂に成るから、英語や漢語で誤魔化して居るに過ぎまいと云つたさうだが、更に近頃の新聞紙が報ずる所に依ると、東京帝國大學の某教授の所には、四國の田舎から結婚の準備として、相性の善し悪しの判斷を頼みに來た女があると云ふ事である、相對性原理が世界の隅から隅迄流行するに到りたる理由の第一は此誤解で有る乎も知れん、假令さうでなくとも、世間では兎に角餘程誤解して居る様に見受けられます。而して男女の相性や男性と女性との相對的關係を論究するのも、非アインスタイン相對性理論の一種である事は勿論である。

五九郎「時間や空間でさへも相對的であると云ふ説が流行する今日此頃、まさか道德だけが絕對的であるなどと主張する事は出來まい、道德もまた相對的であると云ふ事になると泥棒にも三分の理ありと言ふ日本の諺が眞理に成り、博愛主義のキリスト教國がヂユデア人を犬猫視して平氣で居られる理由も明白になり、動物虐待の不當を極力宣傳する程道德心の發達した米國の貴婦人達でも、有色人は動物でないから虐待は勝手次第たるべしと云ふ主張を是認される事にな

る。嘗て一休和尚は庭前に曲りくねつて生えた松樹を指差し、あれを眞直に見る法如何と質問したさうだが、物事は標準の奴り様次第で、曲つた物でも杓子を定規にして測つて見ると曲つて居ない事になるよ。」

三太郎「あれも相對性これも相對性と言ふ事になれば、他人の頭をなぐつて置き乍ら、私になぐつたのではない私の手が自由に運動して居るのに彼の頭がそれを邪魔したのであると言へる事になる、そんな事を主張するのは餘りに亂暴な議論である、露國の如き破壊的の處では兎に角だが、統一ある文明國には通用せんではあるまいか。」

五九郎「必ずしもさうとは限らんよ、近頃我日本でも流行物に成り盛に唱道せられて居るアインスタインの相對律が、英國の天文學者に依つて行れた日蝕觀測の結果、明かに事實と一致する事が檢證せられたと世間から認められた事は誰でも知つて居るでせう、其有名な日蝕觀測の結果がロンドンで發表された際に、之に關し英國國立天文學會に於て會員が議論した記事を読んで見ると、エヂントンと云ふ教授は相對性原理が主張する空間、時間及び力の概念が如何なる物である乎を會員諸氏に簡単に説明して居る、其説明の内に「吾人が運動する際に最大の徑路から

離る可く餘義なくせらるゝならば、其時に吾人は外力に働かれたと感ずるのである若し、是が自己の脚下にある地面に依つて妨害せらるゝ場合には重力があると言ふに過ぎません、熱せる林檎が枝を離れ、ば此林檎と恰も其下に靜坐せる紳士の頭とが衝突する、ニウトンは此事實を説明するに地球の引力と言ふ物を引合に出し、林檎が引力の爲に落下して紳士の頭を打つたと言罪を林檎に歸したのである、然るにアインスタインの一般相對性原理に従へば、其枝から離れた林檎は宇宙間に自由の行動を取つて居るだけで、それを不都合にも紳士の頭が妨害したのである。從て衝突の罪は林檎に非ずして紳士にあると説明して居りますよ。」

三太郎「是は驚いたね、尤も電車の中で甲が誤つて乙の足を踏んだ場合には足を踏まれた乙の方から「どうも濟みませんご免下さい」と云ふのが英國風の禮儀であると言ふ事は前から知つて居るが、アインスタインの相對性原理に基く理論から言へば、それが正當であつて日本の様に他人の足を踏んだ甲が踏まれた乙に謝罪する理由がないと言ふ事になるですね、斯うなつて見ると道德の根柢が全然アインスタインに依つて破壊されたと言はざるを得んではありませんか。」

五九郎「勿論さうです、それだから西洋では大騒ぎをして居るのです、アインスタインの相對律

を是認する事は決して哲學者や理學者の如き學究間のみの問題ではなく全社會の大問題で其影響の及ぶ處は日本の政治家などの夢想だも成し得ざる處なすよ、眞に相對性を理解し本心から之を主張する者があれば、其者の行爲を舊道德觀に依て批評するのは、新式のメートル法に従つて造り上げた新しい疊を在來の曲尺で測定し、寸法がはしたで好くないと言つて居る様な者です。幸にしてアインスタインの相對性を眞隨を解し得る者は世界に一ダースしか居ないさうだから案ずる程でもあるまいが。」

三太郎「疊と女房は新しいのが好いと言つても、新式のメートル法で疊を造る前に先づ其室をメートル法で改造するのが順序でありませんか。」

五九郎「相對性理論に關する講演を聞き或は活動寫眞などを見た人々の言ふ處に依れば體裁上から了解し得た如くてらふ人は別として、も大部分は了解が出来たけれども、おしまひの方はむづかしくて殆ど何の事やら譯がわからなかつたと言ふのが普通の様であります。世界に一ダースしか了解し得る者が無い程難解なる相對性理論、が一二時間の講演や活動寫眞で大部分了解し得ると言ふ事は誠に天下の奇蹟であると私は疑問にして居たのであるが、其後私自身種々の人の通俗講

演を聞き活動寫眞を見るに及んで始めて其疑が解りました、私の見る處にして誤がないならば其解釋は斯うであるらしい。講演にしても活動寫眞にしても物理學や力學等に關して極めて僅か素養を持つて居る公衆を相手に説くのであるが故に、順序として先づ在來の力學即ちニウトンに依つて説かれた物から始めなければならず、到底一足飛に開口一番アインスタインの理論に突入する事の不能なる事は勿論であります。而して物理學上の素養に於て程度の低い公衆を相手にすれば、其程度の低い程益々長く豫備的講演を續けなければならぬ結果として、甚しき場合には、一時間の講演の内にて始めの五十五分は在來の物理學上有り觸れたる力學の説明に費し、僅かに最後の五分間に於て極めて簡単にアインスタインの理論を述べなければならぬ様な事が珍らしくない。其處で聴衆が其講演の大部分を了解したが、最後の部分はむづかしくて解する事が出来なかつたと言ふ事は何を意味するかと言へば、之を正當に言ふ時はクラシカルな物理學即ちニウトンの力學で説く處の物は了解出来たがアインスタインの相對性理論は全然理解し得なかつたと云ふ事になるのではあるまいか、従つて最後の五分間の講演を了解せざる者はアインスタインの字も解し得ざりし者であると斷言して差支ないと私は信するのであります。

三太郎「アインシュタインを待たずして在來の學說上から既に知らるべき相對性原理と云ふのはどんな物でありますか。」

五九郎「東洋には昔から宇宙と云ふ熟語がある、辭典に依る字は上下四方或は六合とある故に現今謂ふ處の空間を意味し、宙は往古來今とあるから時間の事である。従つて宇宙と云ふのは時間と空間との渾一體を指す筈である故に吾人の祖先が宇宙と云ふ言葉を作り出した際に既に時間と空間とは互に獨立的に存在し得るや否は別問題としても、兎に角吾人の人生に直接關聯する物は單獨なる時間ではなく、或は單獨なる空間でもなく、時間と空間とが互に相合して離る可からざる渾一體となれる宇宙であると認めて居た筈である。」

三太郎「それは勿論さうです。」

五九郎「吾人は空間内の一點と他點とを區別して位置と云ふ概念を得るのであるが、任意點甲の位置を確定的に指示するには基點乙を定め、此乙點より上下四方の三方向に沿つて測りたる甲迄の距離を以てするのである、例へば或時刻に於て宮城野の上空にある飛行機の位置が東北大學觀象所を基點として東の方に四千五百メートル、南の方に三百五十メートルの上の方に七百八十メートルと云へば唯一的に決定せられる、斯くの如く吾人の空間に於ては三個の量に依つて其位置が決定せられるから是を三次元の空間と云つて居る。」

然るに汽船が太平洋上を航海し居る際には、任意時刻に於て例へば横濱港を基點として東方三百海里南方千二百海里に在ると云へば其位置が明確に示された事に成る。従つて水面上に生活する者の空間は二次元であると云ふ事に成る、更に軌道上を走る列車を考ふる時は例へば、東北本線の下り列車が仙臺を去る百八十哩の點で事變に相遇したと云ば、其場所は唯一的に決定せられる故に斯る物は一次元の空間に活動して居ると云はれる事になる。」

三太郎「軌道が直線であるか曲線であるかと云ふ問題は軌道外に出る事の出來ざる物には起る筈がなく、海面が平面である乎それとも曲率を有して居る乎と云様な事は、水中を周視する事も空中を見廻する事も出來ず終生水面上を以て全世界と考へて居る物には、考へ及ばざる處であるのは當然ですね。」

五九郎「吾人は自然現象の等時性を認容する事に依つて時間を測定する事が出来る、例へば太古以來太陽が出没を繰返し居る故に一回出沒に要する時間は不變であると認め、之を一日と稱し日

數の多少に依て時間の長短を云ひ表はし、或は又繰返されたる四季の變化の回数に依り何年と言ふ如き測り方を採用して居る。通俗的の一日は最も早く採用された時間の自然的單位であるが、人文の進化と共に一日より短き時間を測定する必要が生ずるに及んで時計の考案せられたのであるが、例へば振り時計であるならば其構造は如何に複雑であつても要點は振子の振りたる回数に依つて時間の長短を測定するに過ぎないのである。

地球の軌道が楕圓形であり太陽は其一つの焦點にある事や、軌道と赤道とが二十三度半だけ傾いて居る等の理由から精功に作られたる時計に依つて時間を精測して見ると、一晝夜の長さは季節に依つて長短の差がある故に、文明國に於ては其平均を示すべき假設太陽を標準にして時間や時刻を云々するのであるけれども、事柄を簡單に説明する爲に、茲では太陽が地球を中心として圓運動を成すものとして話を進めて行く事にする。

三太郎「それが相對性原理と何の關係がありますか。」

五九郎「太陽が地球を一週する時間を一日とし、是を適當に細分して時分秒等の單位を作り吾人は時間を測定して居るのであるが、時刻を示すには更に其基點を定める必要がある、何時を時間の始

まりとしても差支ないのであるから、便宜上太陽が正南に來りたる時刻即ち正午を時間の始めとして、是より何時何分と數へる事にして話を續けて行きませう。」

地上から見たる太陽は明かに毎日東から西に向つて動いて行くのであるから東にある甲地から見て太陽が正南に見ゆる時刻に、之をそれより遙に西に當る乙地から見れば正南よりも多少東に偏して見ゆる事は當然の理である、而して甲地から見ると太陽が正南に見ゆる時刻を甲地の時計にて正午とするならば、乙地から見ると太陽が正南に見る時刻を乙地の時計にて正午とすべきは當然である故に東西所を異にした甲乙兩地の時刻は同一であり得ない事勿論である。斯る時刻を甲乙各地の地方時と稱して居る、詳言すれば仙臺には仙臺時間があり福岡には福岡時間あるがと言ふ事は理論上正當なる事である、吾々が各自に其地方時を使用して居ては社交上不便である故に、或特殊の地方の時刻を共同に採用する事に約束し是を標準時と名附ける。現在に於ては英國グリニッチ天文臺に於ける時間を世界の標準時に採用し、夫より九時間進み居る時刻を日本の中央標準時として居る。従つて吾人の時計にて午後九時が英國の正午であると云ふ事になる。」

三太郎「空間を離れて時間はないと言ふ説明ですか。」

五九郎「日没後北天を眺め一二時間を経過せる前後に於る星の位置を比較して見ると、衆星が圓運動を成し其共同の中心に當りて一個の大なる星のある事が知れる、是を北極星と言ふのであるが、仙臺にて北極星の高さを測定して見ると約三十八度十五分である、然るに此高さは南或は北に行くに従つて變化し、地上にて約二十八里北に行く毎に一度宛高く見える、而して赤道にては北極星は地平線にあり、北極にては頭上に見ゆる故に、赤道から北極迄は二十八里の九十倍にて地球の全周約一萬里其半徑は約千六百里であると云ふ事になる、而して月の距離は其半徑の六十倍に過ぎざる物であるが、太陽の距離は甚大にて里數などでは表はす事が出来ぬ程である」。

三太郎「前置きが長過ぎるですね」。

五九郎「光は一秒間に三十萬軒の速さにて空間を傳はるのであるが、太陽から地球に到達するには約五百秒即ち八分二十秒を要する筈である。然るに東西は何れも我が太陽系を離れる事非常大の所にある物で、最も近いと言われるケントウル座太陽星ですら其光が我が太陽系に到達するには四年餘を要し、其他の恒星に至つては數十年數百年或は數十萬年を要する物と信ぜられて居る。今述べた所を言ひ換へて見れば斯うである、假に太陽が突然碎けたとしても其碎けた有様は直

に我々に知られるのではなく、其後八分二十秒を経過してから太陽が碎ける様に見えるのである。従つて吾人が唯今太陽が碎けるのを、肉眼で實際に見たと言つても其實はそれよりも八分二十秒以前に碎けて居るのである。但それは地球上の何人も知り得ざる事實で、只太陽に居る人が知るのみである、同様に地球が今突如として粉碎しても太陽の天人は其後八分二十秒經過する迄は知る事なく、八分二十秒經過して後に地球が今碎けたと認めるに相違ない、従つて地球上の人間が唯今と云ふ、時刻と太陽上の天人が唯今と言ふ時刻とは同一時刻でない事は明白である」。

三太郎「地球上に起た現象を太陽の人が論ずる場合には、地球人が見るよりも八分二十秒遅れて居り、同様に太陽に起きた現象を地球人が議する場合には、天人が見るよりも八分二十秒遅れる事になると言ふのですか。」

五九郎「或は又太陽に黒點が顯れたと同時に、ケントウル座の星の附近に新星が出現したと云ふ如き場合を考へて見るに、地球上の人間から見れば是等の二現象は同時に起たのであるが、之をケントウル座の星に住する天人から見れば、新星が自分の近所出現して後四年餘を経過してから太陽の黒點が見える事になり、更にケントウル座と正反對の天に居る天人から見れば、太陽

の黒點が見えそれから四年餘を経過して初めて新星が見える事になる、斯くの如く考へて見ると現象が起る時刻の前後の關係、即ち過去も現在も未來も、凡て絶對的に定まつた物ではなく見る人の立場に依つて變化すると言ふ事になります。」

三太郎「成る程、生起の時刻の前後に依つて因果關係を定めるならば、一つの世界から見ても甲が原因で乙が其結果である場合にも、之を他の世界から見れば反對に乙が原因で甲が其結果であると言ふ事になる。即ち時刻の前後も因果關係も凡て相對的の說であると云ふ事に成るのですね。」

四九 時間の伸縮

地球の上に靜止して居る我々から見れば太陽は一晝夜二十四時間で東から西の方へ地球を一週する。従つて地球の周圍を經線に依つて三百六十度に區分して考れば、一時間に十五度宛の割合で太陽が東から西へ進む事に成る。獨逸のベルリンから見ると沿海州の浦鹽港は經度で約百二十度程東に當る、故に太陽が浦鹽港で南中してから八時間を経過せる後に始めて伯林の空で正南に見える筈である。シベリヤ鐵道が再び全通して十六日間で伯林から浦鹽に到着する様に成つてから、

平均毎日七度半宛の割合で東に走る物と假定して見る。其處で吾々が伯林で正確な時計を買ひ求め長い間伯林で檢定の結果遲速なく、必ず正午には十二時を指示する様に出来て居る事が知れてから、其時計を持って歸朝の途に就いたとする、正午に伯林を出發し翌日晝食の際に甲停車場の時計を見ると正に十二時である。然るに吾々の時計は十一時半を示して居る、更に翌日の晝食には吾々の時計が未だ十一時であるのに晝食の準備が出来て居り、停車場の時計を見ると慥に十二時を示して居る、斯くの如く毎日々々三十分宛吾々の時計が遅れて浦鹽に來た際には、吾々の時計が午後四時を示して居るのに市内では丁度晝食の時刻である。然らば汽車に乗つた爲に時計が狂ひを生じたのかと言ふに其日停車場の時計に合せて置いて見ると二日経つても三日経つても進みも遅れもしない。即ち一所に靜止して居れば正確な時計でも運動すれば遅れると云ふ事が明かになる、停車場に居る市民の時計と汽車に乗つて來る。旅行者の時計とは一致しない。而してそれは誰の時計が狂つたのでもなく双方共に正確なる時計である。

三太郎「さう云ふ話は嘗て聞いた事がありますね、太平洋で同じ日が二度あつた際に。」
五九郎「君が愈々東京に着して親族や知友から歡迎の宴に招かれたと假想して見る。或る人の歡

迎の辭に百四十四日に互る長途の旅行云々と云ふのが耳に止まつた。自分では百四十五日間の旅行をしたと勘定して居る筈であつたから、不審に思つて歸宅匆匆旅行日記を調査して見たが疑なく百四十五日間の記事が書いてある。食事の回数や懐中時計を捲いた事迄詳細に調べて見たが何處にも誤りを見出す事が出来ない。其處で家族の者に聞いて見ると出發の日と歸着の日とを明言されたが、それを土臺にして計算して見ると矢張り百四十四日にしか成らない。誠に不可解の事實であると思ふかも知れん。」

三太郎「甲は此夏横濱を解纜して先づ米國に渡り歐洲を見物して歸朝し、偶然にも友人乙は同日に横濱を解纜して上海に向ひ、印度洋を経て歐米を漫遊し、北米から歸朝したとしたらどうなりますか。」

五九郎「乙の日記を調査して見れば百四十三日の旅行となります。」

三太郎「印度洋の荒波に酔つて一日も二日も夢中に暮した筈もあるまい。甲乙兩人の日記に二日の相違がある。甲は百四十五日を以て世界一週し、乙は百四十三日を以て世界を一週し然も出發の日も歸朝の日も甲乙共に同一であるとするれば驚く外ないですね、而して留守居をした家族の言ふ

所に從へば甲乙共に百四十四日間の旅行ですね。」

五九郎「靜止の状態から見た時間と運動の状態から見た時間とは同一でないと云ふ事を認めれば可いのです、留守居の人の一日は印度洋に向つて航海し居る旅人の一日よりは短かく、太平洋を経て米國に向へる者の一日よりは長いと言ふ丈です。従つてシベリヤ經由で歸朝の際に所持の時計が遅れたのも同一理由からであると見れば可いのです。」

三太郎「其理由は何處にあります。」

五九郎「吾人が一日を今日の正午から明日の正午迄とし、正午は其當地で太陽が正南に來た時刻と定めたが、太陽が東から西に動いて行く爲に、太陽の運動する角速度と旅行者の角速度との比が省略し得ざる場合に生ずるに過ぎません。」

三太郎「聞いて見ると我々が云ふ時間と云ふ物は當てにならんもんですね。」

五九郎「吾人が時間を測定するには週期的現象の繰返されたる回数を數ふるのである、従つて其現象が一回繰返される時間は恒常不變であるとの假定は暗々裡に默認されて居る。然るに吾人が或現象の繰返される時間を認識する場合に、其週期は假令不變であつても見る人々の立場に從つ

て必ずしも一定不變ではなく見えるのである。例へば東京の實業家が旅行して仙臺に滞在中に、留守居の細君が七日に一回即ち毎日曜日に手紙を出したとすると、毎月曜日に主人の手許に届く、従つて七日に一回の割合で手紙を受取るから出すのも受る者其週期は一致する、然るに主人が旅行を續けて次の週には青森に居たとすると、日曜日に出した手紙は火曜日に着から先週に手紙を受取つてから八日を経過して手紙を受領する事になる。更に其次の週には札幌に居たとすると、日曜日に出した手紙は水曜日に着くから矢張り八日を経て受取る事になる、従つて主人から見れば、留守居の妻君が忘れて八日に一回しか手紙を寄越さんと思ふ乎も知れんが、實際には東京に居る細君は七日に一回宛間違なく手紙を出して居るのである。』

次に立場を變へ主人が旅行先で出した手紙を細君が東京で受取る日附を考へて見よう、仙臺で日曜日に出したのは、東京に月曜日に着くから仙臺滞在中の手紙は七日に一回宛到着する、然るに青森で日曜日に出した物は東京に火曜日に、又札幌で日曜日に出した物は東京に水曜日に配達されるから八日に一回宛到着する。従つて細君の方でも初めは七日に一回宛書いたのに今では八日に一回しか書いて呉れないというらむかも知れん。

三太郎「して見ると、實際には前にも後にも心に變りは無く、七日に一回宛書いて出す手紙でも相互に運動があつて、兩者の肉體間の距離が遠くなる際には之に相應して相互の心も遠くなつて八日に一回しか書かなくなつた様に見える。而してそれは相對的で細君は主人を疑ひ主人は細君を疑ふ事になりますね。』

五九郎「實際は兩者共に變りがないので唯運動して居るが爲に變りたる如く見えるのである。萬一晝夜の區別も時計もなく、逆に手紙を書終り投函するのを以て時刻を測定すると假定し、一體投函する時間を一刻と命令したならば、兩者が静止して書れば細君の一刻と主人の一刻とが同一であるけれど、其間に運動あれば細君から見れば主人の一刻が長い様に見える、主人から見れば細君の一刻が長くなつた様に見える、換言すれば互に他の時計が遅れて行く様に思ふ事になる筈でありませんか。』

三太郎「時間がそんな風に不定の物であるとするとな長者など言つて、年齢の多少に重大な意味を持たせる理由も消えるではありませんか。』

五九郎「勿論さうですとも、年齢とは何乎と云に一年経過したと云ふのは地球が太陽の周圍を一

回公轉したと云ふ事であり、一日経つたと云ふのは地球が一回自轉したと云ふ以外には何の意味もないのでありますよ。それでありますから一日や一年は地球に取りては重大な意味がありません。うけれども吾々人類には何等關係のない事であります。』

三太郎『成る程ね、さう言へばつまり、甲の年齢が五十歳であると云ふのは、甲が生れてから今迄地球が既に五十回公轉をして居ると云ふに過ぎないのですね。其間に甲自身は寢て居た乎遊んで暮した乎、そんな事には一切無關係だから甲の價値を決定する材料には成らんわけです。』

五九郎『他人の頭痛を疝氣に病むと言ふ諺があります。甲が生れてから乙の疝氣が五十回病んだ乎、三十回痛んだ乎、そんな事は何も甲の價値に關係がありません。甲の價値は甲自身の肉體或は精神上に成し遂げられた事項の分量に依つてのみ増加する筈ではありません。』

三太郎『乙の疝氣が何回痛んでも幾度感冒に罹つても甲の價値に關係がないならば、地球が何回公轉しようとする自轉しようとする甲の價値を左右する理由がないとの御議論です乎、君もなか／＼皮肉な事を云ふね。』

五九郎『それが皮肉なら、もつと適切な例を擧げて見ませう乎、蠶の一生を見給へ、蠶が化生し

てから何日を経過したと云ふ事が蠶の齡にどれだけの意味を持つかと云ふに、それは單に地球が何回自轉したと云ふだけで蠶の發育には無關係でありますよ、詳言すれば化生してから三十日にして漸く四齡に達するのもしあれば、二十日にして既に上簇するのこともあります。』

三太郎『さう云はれて見ればさうです、鶏の卵なども生れてから三日経ても十日経ても卵自身には何等の關係がなく、親鳥が是を暖めた日から三週間目に化生するのは不思議な事と思つて居たが、つまり鶏卵を暖めなければ地球が三回自轉してもそれは地球に關する事柄で鶏卵から見れば時間は一刻も経過して居らんと云ふ事です。』

五九郎『蠶兒や鶏卵の一生が地球の自轉回数に依つて左右せられないならば、苟くも萬物の靈長たる人類の價値が地球の自轉數や公轉數で決定せられる理由がないではありません乎。』

三太郎『さうなつて來ると年効など言ふものは一文の價値もなくなつてしまふです。』

五九郎『一文の價値もないと云ふわけではないが年効がなくとも差支ないと云ふ事は出来るさ、つまり時間と空間とは互に關聯して居るのであるから、時間的に長く經驗する代りに空間的に廣く見聞しても結果は同一になります。例へば天人が地球に來て下界の人間が生れてから死に到る

迄如何なる順序を経過するものである乎を調査する場合を假想して見るが良い。

三太郎人間の一生を調査するなら、丁度下界に來た際に生れた赤子の近所に逗留し、五十年なり七十年なり其赤子が成人して老衰し死亡する迄觀察すれば良いでせう。夫が何より慥な方法さ、五九郎物事を時間的に研究する昔の人の遣り方はうそさ、けれども少し頭の良い天人ならばそんな事はせんよ、東京の様な大都會を一日かけ廻つて見學するさ、赤子の生れるのも居れば子守に抱かれて居るのも居り、小學校から中學生或は結婚式も見られるし、白髪の老人も居れば葬式にも出逢ふにきまつてゐる。さうすれば、つまり地球上の人類は生れた時は赤子で壯年に達すれば結婚し、竟には白髪の老人となり死んで火葬せられるものであると云ふ事を推論する事が、一日地球上に滞在すれば出来るでありません乎。

五〇 氷河見物

生れて既に四十年にもなるのに未だ一度も避暑旅行と言ふものをやつた事がないから一寸暑中の話でも出ると自分一人だけ仲間はずれになる様な氣がしてならない、そんな事から何時か一度

は人間並に避暑旅行と言ふものを自分もやつて見たいと思つて居たのは可成りの長い間である。扱て、夏が來てそれでは何處に行かうかと云ふ段になるとあんな處はつまらない。そんな場所は面白くないと言ふ考が先になつて、躊躇して居る間に遠慮なく夏が過去つてしまふ。こんな調子では一度避暑旅行をしたら最後最早二度とはする氣になれない、又どんな事でも一度は體驗して見るも良いが、二度も三度もする必要もないからと思ひ切つて大々的な避暑旅行を企てる事となりそれでは一つ北氷洋を縦斷して出来る限り北極に向つて突進して見ようと決心した、是なら一生にたつた一度の避暑旅行でも臆面なく他人の前で話する事も出来る筈と思つたのである。

三伏の炎天に永遠に氷を以て鎖され居る北氷洋への大々的な避暑旅行、景氣を附けて言へば即ち北極探検を思ひ立つたのであるから第一の準備として先づスキーやスケートの稽古を始めた、練習場所は北緯五十度の地點であるから、日本で言ば樺太島の真中日露兩國の境界に當るが、實際の所は獨逸の首府ベルリンの大公園即ちチーア、ガルテンの大地である。但其處には紳士淑女大入満員であるから全く初めての者には到底滑る氣になれない、其處で初めの三四日は或るカフェーの後庭で手ほどきではない足ならしをやつた。カフェーの庭の内に池があるのではない平滑なる庭

上二面に氷が張りつめてあるのだ、大寒の候には日中でも気温が氷點下十餘度に降り、一寸外出すれば鼻が氷結して鬚がてんぶらの如く固化する寒さであるから、水道を利用して時々庭前に散水すれば立派なスケート場が出来上るのである。

庭内には附近の子供等が数名来て居る、初めにはスケートを附て立つ事さへも容易でなく、滑るなどは到底出来まいと悲觀して居ると、子供等が右と左の両手を取つて滑らして呉れる。

子供甲「此處はヨーロッパだから凹凸があつて滑り悪い、アフリカの方に行きませう、サハラの大砂漠なら縦横自在に滑れます。」

子供乙「そんなに早く引張つては駄目よ、此日本人は子供の時に何をして遊んだのでせう滑る事も知らないなんて。」

三太郎「アフリカつて何處にあるんですか。」

子供甲「地中海の向ふ岸がさうではありませんか、日本から印度洋を経て獨逸に来る際にはアフリカを見て来たではありませんか。」

子供乙「有名なスエズの運河を通つたでせう、スエズから汽車でカイロに行きピラミット見物

をしてボーイサイドから復ひ船に乗れると言ふ話を、何時でしたか他の日本人から聞きましたよ。」

日本人の事を英米人はジャパニースと言ひ、獨逸語ではヤバネーゼと言ふのが古來の習慣であつた、然るに是と同一の語尾を持つ者は支那人とか葡萄牙人など何れも二流以下の國民のみである、一等國たる英米人自身はイングラングーとかアメリカナーと云ふ風に特種の語尾が附いて居る其處で世界の一等國たる日本人をヤバネーゼと云ふのは悪いと言つて、英米人と同様に之をヤバナーと呼ぶ、稀に田舎者が無教育の者でなければヤバネーゼとは言ひません。

三太郎「獨逸に來たばかりの頃はヤバネーゼと呼ばれてもヤバナーと呼ばれても格別兩者の區別など心に浮ばずに居りましたが、段々に慣れてしまひ、今では田舎者などが稀にヤバネーゼと私語して居るのを聞いても非常に耳ざわりになり、何となく侮辱された様な感じが起る様になりましたね。」

五九郎「英國や米國に行つてジャパニースと言われると何となく不快を感じるのは、恐らく私ばかりではあるまいと思ふ、英語だけを學んだ人達は自らジャパニースと名乗つて得意で居るかも知

れんが、獨逸に長く居た日本人は誰でも英米人からジャバニースと言はれるのを好まない様ですよ。』

三太郎『さうですね、私などは獨逸に來ぬ以前は何とも思つて居なかつたのですが。』

五九郎『東京帝大の或教授は米國人から君は日本人か支那人かと質問された際に、憤然としてさう云ふ君は米人か猿かと反問したと云ふ有名な話がありますよ。』

三太郎『成る程ね、米國人には日本人と支那人との區別がつかぬかも知れんがヤンキーとモンキーとの區別を知つて居る日本人も多くないかも知れんね。』

五九郎『中にはヤンキーと言へばモンキーとドンキーの混血兒位に思つて居るかも知れんさ。』

三太郎『流石は獨逸の子供であると感心したね、日常の遊戯にもヨウロッパだのアフリカだの何となく世界的な點が閃めいて居てお山の大将己れ一人をやつて居る日本の子供と同じには見られない様な氣がするよ、兎に角轉ばずに滑れるだけの自信が附いた頃から本場所に出掛て見ると、樂隊がありそれに合せてダンスをやつて居る若い男女の一團もあれば鬼ごっこに夢中になつて居る少年隊もあり、更に驚いたのは高砂の尉と姥かと疑はるゝ白髪の老人夫婦が、氷點下十餘度の寒

天に曝されて、若い者と共にスケーティングをやつて居た事である。風彩から見て相當の地位にある人物と思はれたから附近の者に質した處が有名なるゲーリユック博士で其令息が既に大學教であると云ふ事でした。四十歳にして早く初老と稱し六十歳で隠退する日本の學者と比較にならない、文化の進歩した大都會には春來り夏來りてもスケートの練習を續けて行くに差支ないだけの設備が出来て居る。唯入場料が少し高價になるに過ぎない、炎天の下をのがれてスケート場に入れば、製氷機の活動に依り中央の池は完全に氷結し老若男女が縦横に滑り廻つて居る。周圍には幾百を數ふる入場者がビールやワインを前にして或は眺め若しくは話をして居る。入場者は必ずしも自らスケートをやるのではなく大多數は避暑納涼の爲であるから滑つて居る者よりも休息して居る者が遙かに多い事勿論である。

八月の二日汽船ターリヤ號に乗込んでハンブルグを解纜し、エルベ河を下りエルゴノランド島に夕陽の映するを眺め、北海を涉り嘗てバルチック艦隊が日本艦隊と誤り漁船を砲撃したと云ふ古跡か名所を月の光に遠見しつゝ、北に進めば、吹き荒ぶ潮風には霧と混じり生心地もなくなりしが、二晝夜の後はノルエーの西海岸に散布せる島嶼に入り其景怡も瀬戸内海に似たり、行く手の

入江霧込めて嶺の嵐も松風も瀧の響も谷に充ち、左右は盤巖巍々として懸河雲際より流れ來り、太古の層岩は或は龜甲の波上に浮べる如く、北緯六十一度以北に到れば凹處概ね苔にて掩はれたれど、凸き處は不毛にて森林なく、嘗ては氷河の作用に依り削られたる特種の地帯は日本に於て見るを得ざる物がある。山高く谷深く氷河白くして江水青し、山又山何れの工か青巖の形を削り成せる、水又水誰が家にか碧潭の色を染め出せる、北峽の朝景色を賞し乍ら午前八時半ローエン港に投錨し馬車を駛せる事約一里にしてローエン湖あり、湖上を棹さして之を縦斷した。此航路はブルエーに特有なる景色の代表的とも言ふ可き物で、其兩岸は五千尺乃至六千尺の高峯疊々として相連り啞々たる白雪其頂を掩ひ白瀧の天降れる如く。所々に其一端を現して居るのは言すと知れた氷河である。頂上は永遠不滅の氷海である故に八月の炎天に到れば壯大なる瀧が雲際より流れ來り雨と風とに削り成せる青巖に逢ふて峨々たる山腹を離れ虚空の中を落下する事幾百尺、或は遙かに甲板上を越えて裏見が瀧となり、若くは風に逢ふて霧降りの瀧と化し旭日之に映じて七色の虹を現じ美觀を呈するのである。山體の上半部は勾配餘りに急なる故に草木などは勿論なく時々岩石の崩壊するを物語つて居る。嘗て山腹崩れ落ち遊覽船と共に百數十名を湖底に埋めた記

念碑が右岸にあるのを見、更に頭を上げ天上を眺むれば啞々たる山岳頭上を壓し一命は風前の灯火に似たる感がある。再び上陸し約一里の間は谷底を徒歩にて進んだ。

三太郎「見給へ、あの人の背中を。」

五九郎「西洋人には珍らしいね、背中にM、Kと名を縫つて置くなどは、日本の車夫の眞似をしたのか知らん。」

三太郎「半白の頭髮が肩迄延びて居る處などは西洋人らしくないね、殊にあの鬚は立派でありませんか一尺もあるでせう。」

五九郎「日本の山中であんな人物に會つたら出羽の羽黒で修業した山伏と思ふね。」

三太郎「講談本にある天狗に似て居るではないか、あれで右の手に烏の羽毛で造つた團扇でも持つて居れば。」

旅は道連れと云ふ事もあるので、近寄つて話をして見た處かハンガリーの大地主でベラーと云ふ人、二年以來世界漫遊の途にあると云ふ事であつた。ハンガリー人は東洋人種であると云ふ事を聞いて居たが其風彩から見て成る程とうなづかれる、背中の大字は畢竟するに誤つてマント

を裏返しに着た爲に、内に隠れる筈の者が表に現はれたに過ぎないのである。

谷の盡くる處は即ち氷河の一端である、遠く望めば蜿々として白瀧の高天原より降れるが如く之に近づけば一大洞孔ありて地上の萬物を呑み盡さんとするに似て居る。口の直徑は十間にも餘り、半圓形で奥行は更に深く内面綠色を帯び、誠に其中に入れば肌を粟を生ずるを禁じ得ない、氷河の下から清水が湧き出で、恰も瀧の水を吐き出して居るが如く滾々として盡きる事がない。

三太郎「氷河と言へば氷が石塊の如く疊々として流れ落ちる物である如く聞えるが實物を見ると案外な物ですね、至で大蛇の如く彎曲した一本の氷の柱ですね。」

五九郎「それですから、昔の人には此氷が其儘で次第に流れ山から下るのであると云ふ事が知られずに居つたのさ、處が嘗て有名なアルピニストの一人が誤つて谷底に落ち行方不明になつた事がある、其後何十年か経つてから、其死骸が氷結した儘で腐らずに里に流れて出たのです。」

ペーラー「死骸が氷の中を流れて来たのですか。」

五九郎「そんな馬鹿な話はないさ、氷河全體が流れて来たので死骸は周囲の氷と共に流れ氷と死骸との間に相對運動はないさ、其處で其アルピニストの墜落した地點から被見された場所迄の距

離と其間に經過した年数とから、氷河の流れる速度を推算して見ると一日に約何尺位とか云ふ様な事になつたんださうです。」

ペーラー「一日に一尺や二尺ばかり下るのでは流れると云ふ程ではないですね、つまり地滑りの様な物ですね。」

五九郎「それでも氷河を横断した一直線上に處々に柱を建て兩岸から觀測すると一目でも直ぐ流れると云ふ事が知れます、實測した結果に依ると真中が早くて兩岸に近づく程遅いさうです。」

三太郎「さうすると全體として流れるのではなく、部分に依つて早さが違ふのなら碎ける筈ではありませんか。」

五九郎「其處に面白味があるので、氷や岩石の様な固體でも非常に緩かに力を加へれば至で流體の如く其形を自由に變へるのです、水は方圓の器に従ふと昔から云つて居るが水ばかりではないのです、氷や岩でも充分な時間さへ與へれば碎けずに丸い物が角になります。」

三太郎「人間だつて同じ事ですよ、つまり時間の問題さ、いくら剛直な石部金吉でもそろりくつとやれば何時の間にか曲つてしまひますよ。」

五一 夏至の火祭

ノルエー國の西岸に特有なる幾多の峽谷は、嘗て氷河の爲に削り取られたる物であると言はれて居る。長さは二十里も三十里も内地の山深く入り込み、一見した處では大河の如くであるが、其實は入江にて、兩岸は何れも五六千尺に達する直立の絶壁なるのみならず、水深も亦二千五百尺乃至四千尺もある。従つて幅極めて狭きに係らず大船の航行自由である。八月の初旬乍ら天候一變不良となれば、身を切るの寒風氷雪の間より來り、流れ落ちる瀧は飛沫を甲板上に投げ、甚しきは全部霧と化して虚空に充ち奈落の底に落ちたるの感なきにしもあらずである。然し乍ら一天晴れ渡れる夕方の景色は又特別である。日は既に没したと云つても寒帯地方の事であるから容易に暗くはならない。午後の十二時は名のみの夜半で、北の空高く反射し來れる太陽の光は緩かに湖上を照らし、兩岸の山は倒影を水中に現じ、蟲も鳴かず鳥も飛ばず唯船の進むを物語る小波の音が船首の方から聞ゆるのみである。

三太郎「山高くして谷深き自然の地勢は、必ずや神話の發達に適する物があると想ふが、ノルエー

ーにはどんな神様があるでせう。」

ペーラー「私はこんな話を聞いた事があります、昔或家の小娘が臺所の窓から何気なしに熱湯を捨てた處が、フルドルと云ふ神が其爲に自分並に一族が焼傷したと云つて大いに騒ぎ出した事がある。それ以來湯を捨てる際には必ず「下に居る者は御用心」と云ふ習慣が出来たさうです。現今でも若し子供が病氣に成ると、あの御袋は湯を平氣で捨てるからフルドルの罰が當つたのさと云ふさうです。」

五九郎「窓から湯を捨てるのは無論悪いですよ、朝鮮などでは朝早くうっかり往來を歩くと頭から小便を懸けられるさうです、フルドルでなくとも怒るのは當然です。」

ペーラー「小便を窓からするのですか。」

五九郎「さうではありません、貴方も夜は寢室内で小便壺にするでせう、それを室内掃除をする際に窓から捨てるんださうです。」

三太郎「フルドルと云ふのは一體どんな神様ですか。」

ペーラー「フルドルと云ふのは非常な綺麗な魔性の者で、時々人の姿に化けて出るが本當の美人

と違ふ點は尻に尾があるだけださうです。此者は常に地中に住み、殊に田舎の人家に近く居ると信じられて居ります。」

三太郎「それではつまり昔の日本人が信じて居る狐と同じ様なものですね。」

ペーラー「或る時田舎の小娘が山畑の木小屋に行く際に、タルルドが死んだとチュリットに傳言して呉れ」と云ふ聲を聞いたから左右を見たが誰も居ない、不思議な事であると思つて、小屋に着いてから朋輩の女にそれを物語つた處が、突然地下で「チュリットは私です、私の亭主が死にましたか」と云ふ聲が聞えたさうです。」

五九郎「それと同じ様な噂は既に紀元百二十年ブルタークの話に出て居りますよ、或る漁夫がギリシヤの附近を漕いで居るとタマス、タマスと自分の名を呼ぶから返事をしたら、バロデスに行つたらバン大王が死んだと傳へて呉れとの頼みであつた。タマスは天氣が良かったら傳言してやらうと思つて居ると、海上平穩無事バロデスに着いたのでバン大王が死んだと云つたら、忽ち島蔭から大勢款、る聲が起つたと云ふ話が全ローマに擴つて居ります。」

船員「此地方に残つて居る神話は、第九世紀頃アイスランドに始めて殖民された時分迄は爐邊で

老人の口から小供が聞いて子々孫々に傳へた物らしいです、一番偉い戦争の神、即ち雷神はオヂンと云ひ、其子トルは空中の支配者で、風の神ニオドルは航海者の守護神であり、平和の神はフレイヤと云ふ女神である。而して山や森や森水などの靈であるトルドはオチンの侍女と見られて居る。其他幾多の神達の像は石或は木にて作れる殿堂内に祭られ、其中央には石造の爐があり、其處で供物が料理され、其烟は屋根の中央に穿たれた孔から逃げ出す様に出來て居たさうです。」

ペーラー「現在でも田舎の家は屋根の真中に孔を明けて烟出しとして居ります。一尺程もある角物を積み重ねて壁に代用し、窓か殆んど無く、夫れに泥炭を燃くのですから屋根裏は烟で眞黒になつて居ります。爐の上には自在鍵が吊され、室の一方は數百年も前の先祖から傳來したかと思はれる頑丈なテーブルで一杯になり、夜になれば魚の油が灯火となるのであるから吾々には到底讀書などは出来ません。」

五九郎「さう云ふ生活を續けて居れば太陽の有難味が沁々と知られるのです。瓦斯灯や電燈が白晝を欺く様になつては太陽も無用に近くなります。」

船員「美神バルダーと云ふのが太陽を祀つたものかも知れません。六月二十三日の晩から二十四

日に懸けた夏至の祭祀が非常な壯觀であります。夜半十二時を合圖に山にも海にも火を點じ此火に依つて惡魔を焼き拂ふのであると信じて居ります。

ペーラー「あの祭は本當に奇麗です、山と云ふ山は見渡す限り篝火で埋められるばかりであります。後、薪を積んで入江にも湖水にも無數に浮べ、凡て是に點火すると其火が水に寫り、周圍に餘所行きの着物を着た男女が陸上にも船の中にも一杯になつて、踊るのもあれば歌ふのもあり至て狂氣になつて騒いで居ります。」

三太郎「夏至と云へば日本などでは暑くなる時候ですから、火を燃す祭りなどはご免を蒙りたいけれども、ノルエーの如く寒帶地方殊にこんな山中の海上では、火を燃して騒ぐのに丁度適當な氣候かも知れんですね。」

五九郎「バルダーと云ふのは太陽の事です、自然崇拜時代に於ける最大の祭事は太陽を祀る事でありました。而して夏至と冬至とは太陽の消長に於て極點に達せる日であるから、天體運行に關し人類無力を感じたる吾人の祖先は祈禱に依つて太陽の復歸を願はんと欲し、此日に祭事を行ふ事になつたので此祭は世界各国の民族に共通であります。」

船客甲「私の郷里ボヘミヤ地方では此日に青年が歌を唄ひ乍ら各戸に薪を乞ひ、若し與へざれば不吉な事が起るぞと強迫します。それから青年は人形を造りて樹木の上に結び、少女は之にリボンを付け火を燃しますと青年は其木に登りて之を取ります。次に是等の青年男女は篝火を隔て、相對陣し、女子は自己の想ふ青年に是を投げつけ男子が之を受け損ずれば縁がないものとし、す。それから互に手を取り合つて火を飛び越えますが、九個の盆火を見た者は其年の内に結婚が出来ると云つて居ります。」

船客丙「巴里の近在にもやはり九個の盆火を踊り廻る娘は年内に結婚する事が出来ると云ふ迷信があり、私の子供の頃までは盛に火を燃やしました。殊に六月に雨が多い年には、此火祭を盛大にすれば如何なる霖雨でも晴れると云ひます。」

五九郎「人類は社交的動物であると申しますが、動物の社交的集會は何を目的として催されるかを考へてご覧なさい、蛙合戦は領地の爭奪を目的として陣を張るのではありません、螢合戦だつて始めから戦はんが爲に飛び集る物ではなく、何れも種族保存の最大目的を達せんが爲である。吾人の祖先が篝火の下に集合して踊つたり唄つたりするのも其根源は同一であります。其所で一

晩の内に九箇所も掛け持ちして相手を探がし廻る程熱心な少女なら、年内に結婚が出来るのも當然でせう。」

船員乙「私は獨逸の者ですが、矢張り悪運を火で焼き捨てるとか云つて夏至にはお祭をします。モーゼル河附近にあるコンツ地方では、村内の各戸から麥薬を集めてストロンベルグと云ふ山上に積み上げます。此際に萬一も其薬を出し惜む家があれば、一家の者が其年に脚を折り或は子供を失ふと信ぜられて居る爲に競うて寄贈します。夜になれば男子は凡て山上に集り、女子は中腹にある井の附近に集まり、大日輪に點火して頂上から山下に轉がし、群集は手にく松明を點じて之に續き、山腹に到れば婦女子之に和して歡聲山野に響き、無事にモーゼル河に達すれば葡萄豊作疑ひないと信ぜられ、葡萄園主から葡萄酒を若衆に寄贈する慣例になつて居ります。」

船員丙「佛國の田舎では、若い者が車を引いて娘のある家に出掛け「葉よりも實が多く」と云ひ乍ら薪を貰ひ集め、

松明燃せ、葡萄畑で燃せ、小麥畑で燃せ今年嫁に行く娘の祝に燃せと呼び乍ら松明を携へて畑地を廻る地方もありますが、其際に煙の棚引く方角に依つて吉凶を占

ひ、煙の棚引いた方位にある果樹園は豊作であると信じて居ります。」

ペーラー「私が佛國に行つたのは夏至の頃でなくたしか春でしたが、其晩に見ゆる篝火の数だけ次の祭日に卵を贈物に貰えるとか云ふので子供等は熱心に火を燃やし、」

林檎がなれ、梨子がなれ、櫻桃がなれ、眞黒くなれ。

と呼び乍ら、盛に燃える松明を枝の間に突込み乍ら林檎や櫻桃の畑を走り廻つて居るのを見ましたよ。」

五九郎「火祭を行ふ季節は一定ではなく、一月の元日から暮れの大晦まで色々ありますが、歸する處は太古の時代に於ける自然崇拜の遺風が、地方並に年代に順應する如く其形式を變化した迄であります。勿論其大部分は既に絶滅し、一部は兒戯と化して居るが、稀には他の形に於て復活して行く事もあります。例へば唯今のお話にあるお祭は、果樹園に於ける害蟲驅除法として有効である故に、比較的長く田舎に残つて居るのであります。日本の田舎でも私が子供の頃迄は「蟲送り」と云ふ名で盛に火を燃し、且行列を成して村の内外を巡廻しましたが、其頃は「蟲送り」の眞意義を忘れて迷信に陥り、單に宗教的儀式として執行する故に舊習慣打破の犠牲と

なつて廢止されたが、それと同時に宗教家の手を離れ農學者の口から誘蛾燈と云ふ名で宣傳され春の田面を飾る事になりました。若し後世紀幾百年の後に農民が其意義を忘却し、單に年中行事の一つとして節でもない時に田畑に點燈する様になれば一種の火祭と化してしまひます。最初は科學者に依つて學術的根據から唱道された有益なる事項でも、歲月と共に宗教的儀式となり、迷信に陥り、最後には兒女の遊戯と化するの一般の法則であります。

こんな話をして居る間に船は進み夜は更けて行くと云つても暗くなるのではない、西は夕焼東は夜明け、寒帯地方の夏の夜は一種獨特で夕焼未だ消えざるに早くも夜が明けて太陽は北天に輝いて居る。

五二 火と人生

生物と無生物との區別は何處にありますかと、今私が呈出したならばいくら學者でも餘りに非常識であると冷笑されるかも知れません。馬や人の如き生物と石塊や雨滴の如き無生物とは全然違つて居る事は勿論私も認めて居ります。併し乍らそれは殆んど兩極端を取つて比較するの

であるから正當なる物とは云はれないと思ひます。」

佛教には生者必滅と云ふ句があるから、生物の最大特徴は時來りて遂に死滅すると云ふ事換言すれば始めありて終りある事が少く共生物たるの必要條件かも知れません。けれども必ずしもそれが充分なる條件でない事は明かであります、通例生物の特徴として列擧せられて居る條件は、

第一に養分を攝取し、同化作用に依つて成長し、若しくは新陳代謝すること。

第二には獨立の個性を有する形態を持續して居ること。

第三には生殖作用、即ち自己と相似の個體を分出すること。

第四には排泄物を出すこと。

第五には自由意志を有し、即ち選擇することなどが主要なるものであります。

一般の人々から無生物と認められて居る物體にして、上記の如き各條件を具備して居る物のない事は容易に知る事が出来ます。然るに火は生物にも非ず、且又物質にも非ざるに是等の條件を具備して居ると云ふ事は注目に價する事實であります。

火は生物でないといふ事は今更説明する迄もありませんが、物質でないといふ事は或は讀

者の内にも気が附かずに居た方がありませんかと思はれます。一滴宛落つる苔の下露も積れば谷川となるは何の不思議はない、塵積つて山となるのが物質の特性であるから、然るに幾百年の昔から點ぜられて居る常夜燈の火は未だ嘗て堂に満つる迄に積つた話を聞いた事がない。さうかと思ふと樵夫が捨てた煙草の吹殻に残りたる一灼の火も時を得れば山火事となり、六合に充ち全世界を焼き盡さずんば止まざる底の大事件を誘起する事があるに反し、一杯の水を床上に流しても爲に大洪水を來す恐れなき事は讀者が既に經驗されて居る筈である、物質たる水と物質に非る火との相異は是等の點に於て最も明かに見られませう。

燃料は即ち火の食物であり滋養分であり、灰は其排泄物に過ぎん。バクテリアの繁殖と火の傳播と其間に何の差別をも認める事が出来ない、野火が一定の方向に限りて燃え擴がるのは是明かに選擇の自由を持つ證據である、燃料盡きて灰のみとなれば火の消えるのは食料盡きたる生物が其排泄物の内に餓死すると同一現象であります、燃焼の結果生じたる炭酸瓦斯を消火用として猛火の中に吹き込むのは、微菌の繁殖を防ぐ爲に其微菌の排泄物からなる血清を注射すると同一手段に過ぎない。

物質に非ずして生物の特性を具備して居る火は無生物たる物質を生物化する究極の要素であると認めねばならん。畢竟するに生物とは自然の妙理に基きて無生物の内部に火が宿りたる特殊のものに過ぎないのである。換言すれば無生物は自己の体内に火を宿す事に依つて生物に進化し得るのである、果して然らば無生物たる物質を生物化したる火の精は何處から來たか、それは云ふ迄もなく太陽から來たのである、死物の一塊に過ぎざりし我地球は太陽から惠まれた天火を受け入れる事に依つて始めて生物の住家と化したのであります。』

父母に依つて生れたる子供は未だ必ずしも其父母を知らざるが如く火に依つて生を得たる生物にして火を知る物は尠くない、凡ての生物の内唯人類のみが眞に火を知つて居るのである、支那の傳説に従へば燧人氏と云ふ天子の時代に始めて火を作りて人に火食を教へたとある。

兎に角人類が日常火を利用する事を知りたるは遙かの古代であつて、現今では如何なる野蠻人と雖も之を知つて居るに反し、人類以外の動物には現今と雖も未だ見ざる處である、火を知る事に依つて人類は他の動物よりも一步先に進化したのであるかも知れん。同じ人類の内でさへ火の利用の程度に應じて人文の發達が定まり其優劣が決定せられる事は明かである。

火は萬物の靈であり、靈魂とは火の精が肉體に宿り居る物にて死亡とは火の消ゆる事である、従つて男女間に子の生ずるのは二物の摩擦に依つて火を發すると同一現象であると信する者迄もある。火の生滅自在なるは到底人智を以て測り知る可からざる不可思議の物であるが故に火を以て神となすは當然の事である。太陽及び電光の如き天火、火山の如き地火は單に人の注目を早からしむるのみならず太陽は其恩譯に於て電光及び火山は其威力に於て共に人類を屈伏せしめた。従つて吾人の祖先は太陽の恩恵に感謝して之を神と崇め電光火山の威力に恐怖して之を神と拜んだ。火を以て神と成すが故更に之に依つて正邪を判定し得べしと信するに到りたるは當然である。即ち正しき者は天神地祇容れざる事なきも罪ある者不淨の輩は火の神も亦是を受けずとの理に基くのである、火渡や探湯其他類似の事が東洋でも西洋でも昔から實行されて居るのは即ちそれである。

燧人氏に依つて始められたる火食は人類が火を利用した點に於て一大階段であると同時に人文發達史上に於て一期を成す事は疑ひを容れない。火食と離る可からざる爐は人類最初の建造物であると人類學者は云つて居る。太古の人類は住家としては自然に出來た岩窟を選び或は野山に生る。い繁れる樹木を選ぶ事は出來たが火を保存する爲には自分の力を以つて爐を建設する必要がある。

風に對して火を保護する爲に四方を圍み雨に對して火を保護する爲に天を掩うた。是が即ち家の起原である。最初の家は吾人の肉體を保護する爲に造り上げた物ではなかつた。吾人の祖先は雨にも風にも恐れざる頑健なる肉體の所有者であつたが、火を保存する必要上家屋の建設を企てたのである。

火食は人類の部落的集合を必要とした。少くとも火の保存は人類團體的共同作業の必要を認めしめた一步であつた。凡ての生活は個人的に獨立獨歩を敢てする蠻人にも各自に火を保存する事は容易でない。寧ろ不能の事であつたのみならず其必要はない。一部落に於て共同して唯一箇の火種子を保存して置く事が必要にして且充分なのである。各村各郷が村社や郷社を有し今も猶茲に永遠不滅の燈火を點じ置く處あるは其遺風に過ぎない。

一團體が炊事場を共有するの亦文化生活への第一歩で、大戦後我日本の統治下にある所謂獨領南洋の土人などは、今も猶共同の炊事場でパンの實を蒸し團子を丸めて居るのを著者は嘗て視

察して来た事がある。火食する様になれば各自が單獨に食事を調理する事は非常に困難と面倒とを伴ふ故に、共同生活へ趣くのは自然の順序であるに反して、果實類などを生の儘で常食として居る民族は僅かに十一二歳に達した子供でさへ、親の膝下から離れて單獨生活を敢てするのが普通である。

燈火の發明は文化生活への第二階段である。人類の祖先は初に熱帯地方に繁殖した事は疑ひない、而して人類の五感の内にて肉眼に頼る處の視覚が理想的に發達し、其感度の鋭敏なる事は他の企て及ばざる處であるのみならず、種々の波長の放射線の内にて人類の肉眼に最も良く感ずる波長と、太陽の發散する放射線の内にて最大のエネルギーを有する波長とが一致すると云ふ事實は決して偶然の事件ではなく、明かに人類が太陽の光の下に活動する如く進化した生物である事を物語つて居る。

詳言すれば人類の肉眼の感度は赤外線に對しては零であり、それより次第に増し黄色の處即ち波長約五百乃至五百五十ミリ・ミクロンの部分に於て最大となり、其後は再び減じ黒色を越えれば再び見えなくなるのである。然るに發光體の温度と最大エネルギーを放散する放射線の波

長間との間にはキーンの變位則に依つて與へられた一定の關係があり、温度の低き物は赤色に近き物を多く放散し、温度の高まるに従つて順次に白色に近着するのであるが、我太陽の温度は約五千五百度にして黄色星に屬し最大エネルギーを有する放射線の波長は五百三十二ミリ・ミクロンである。斯くの如く太陽の光と人類の肉眼との間に最も有利なる關係あるのは太陽の光に浴して居る吾人の祖先が環境に順應する如く進化した結果に外ならぬのである。

然るに太陽は四六時中地上を照して居る物でなく、晝と夜とが交代するけれども幸にして天上には月がある。太陽地下に没すれば月が太陽の光を反射して吾が地上を照らして呉れる。但月には虚盈の變化がある。上弦より満月後の數日間は太陽没後と雖も猶白晝の如く活動し得るのであるが、下弦より新月に到る間は暗夜と化してしまふ。従つて太陽の光に依存せる吾人の祖先は月の虚盈に依つて其日常生活を支配された。

而して野蠻人の日常生活の二大中心は色慾と食慾とである。従つて人類の色慾は第一に太陽の運動に基く四季の變化に依つて支配され、第二は月の公轉に基く其虚盈に順應する如く進化した現今に於てさへ婦人の月經と月の公轉とが其周期を同じくするのは決して偶然ではないのである。

る。

暗夜にも猶白晝の如く活動せん事を願ふ慾望は竟に燈火の發明を促した。カロリン群島邊の土人は今も特有なる樹木の葉を以て松明として夜間の行動を助けて居る。而して松明と云ふ熟語が既に大和民族古來の燈火に就て多くを話して居る。日本産の樹木の内では、松の木が最も自然の儘で燈火用に適して居る爲に、初は松樹を燃して篝火となし次には松脂を抽出して棒狀に固化した物に點火して燈火とした。我も亦斯る燈火の下に昔噺を聞いた一人であるから必ずしも古い昔の事でない。菜種子油を使用する行燈は上流の燈火で蠟燭などは宴會の折でもなければ使用せぬものと著者の幼時には思つて居た程であつた。尤も私が留學した頃迄は巴里の眞中にある下宿屋でさへランプが幅をきかして居たのである。

瓦斯燈が發明されたと云ふ話を聞いた英國ロンドンの市會議員が「燈心の無いランプ」それは精神のない人間同様で、此世に實在し得ざる幽靈に過ぎないと論じたが左程古い話でもないのであるから、「油の入らないランプ」とでも云ふべき電燈の事などは古人が夢にも見ざる處であつたに相違ない。

著者の郷里の青年一行数名が金華山參詣に出掛け、仙臺市に於て一流の旅館に一泊し始めて電燈を見て其照明度の絶大なるに一驚を喫したのは當然であるが、女中の説明を早呑込して電燈一組を土産物の内に加へ、歸宅匆々近隣の者を招き自慢の鼻高々と「油の入らないランプ」を天床から吊してスキッチを幾回もくねぢつて見たが、螢の光程も光らないので都會の商人は信用が出来ん、田舎者だと思つていかさま物とすり換へてよこしたと憤慨したのが僅かに今を去る事三十餘年前の事實であつた。然るに大正の今日になつて歸省して見ると、瓦斯燈と電燈とが入れ亂れて家毎に輝いて居るのであるから燈火の發達には實に驚かざるを得ない。

火の和名はヒであるが此外に同訓の物は日、緋、氷などである。何れも火に關係した名稱にて火の要素の一部を共有して居るのである。氷と火とは寒暖全く相反する物にて、日常の常識を以ては到底共通の點を見出し得ざる如く思はれるけれども、共に是等をヒと訓むのには相當の理由がある。一方は暖の最も強き物にて他方は寒の最も烈しき物である、從て寒暖を離れて單に強烈を意味する場合には火と氷とは對等である。換言すれば猛烈なる事、過激なる事は火の第一要素である、而して現代のエネルギー説に従へば物質分子の亂雜なる運動が即ち熱の本體で、熱の極致は火

となるのであるから活動を以て火の第一要素とするのは正當である。

緋の和名をヒと云ふのは其色を取りて火と比較したに過ぎぬ、即ち鮮紅色は火の第二要素である。而して色は即ち光に依存するのであるから、熱と光とを共有する太陽即ち日をヒと云ふのに不思議はない、然るに大和民族が認めた火の要素の内にて最も貴重視せられたのは熱に非ずして光であること云ふ事は注目に價する。光輝強き者は神聖なるものとして崇拜せられ、熱高くして光なきものは悪魔として賤しめられて居る。従つて光なくして熱のみあるものは火と云ふ語を轉用せる場合は見當らない。

人類が火を利用した第一歩は其熱であつた。次に燈火として其光を利用したのであるが、火の光を利用するのは單に燈火としてのみでない。凡ての火は同一の光を放つ物ではなく其燃料に固有なる光があるけれども、昔の人々が信じたる如く點火法の如何や火種子の種類に關係する物ではない。詳言すれば石油ランプの光と蠟燭の光とは其性質を異にするが、同一の蠟燭ならば之に點火するにマッチを以てするも切火を以てするも何等の差を生ずる事なく、假令火葬場から火種子を取りて之に點火するも何等の影響を受けぬ物である。斯くの如く他から穢されぬ處に火の尊さが

あるとも云へるのである。萬一佛前の燈明として不淨の火を忌むものならば點火の方法に關係なく寧ろ其燈火用の油若しくは蠟の種類を吟味すべきである。

燃料に依つて火の光に差異あるを認め、是を利用したのが所謂分光術であつて、現今の世界に於ても唯文明人のみが知つて居る火の利用法の第三階段である。分光術の應用中で俗社界と最も關係ある物は恐らく裁判醫學に於ける毒殺鑑定の場合であらう。毒殺された被害者の胃袋から内容物を取り出して之を燃焼し其光を検査すれば何種の毒素を使用したかが一目瞭然たるのである。此分光術に依つて、上は天文學より下は化學に到る迄現代の自然科學が如何に重要な進歩を成した乎は門外漢の夢想だも及ばざる處である。

光を放たない火はあるけれども熱を持たぬ火の無い事は勿論であるが、凡ての火は何れも同じ程度に熱い物と思ふは誤りである。一番熱い火と一番熱くない火との差は其温度を以て比較したならば普通の火と氷との差よりも甚しい物がある。薬火と炭火とが料理を作る上に於て其味に差を來す所以の物は兩種の熱が其温度に於て等しくない故である。

勿論薬火と雖も燃料を多くすれば強く、炭火でも少量なれば弱き筈であるが、火の温度は其燃料

及び燃焼の方法に依つて定まる物にて燃料を多くしても一定の温度以上に高まる物でない。例へば電気爐の温度は攝氏三千五百度、水酸素吹管は二千八百度以上にも達するが酒精燈は千二百度以下で石油は八百度内外に過ぎん。

同じく火に依つて生ずる熱を利用すると云つても其熱量の多少を標準とする場合と其温度の高下に重きを置く場合とは全然區別して考へる必要がある。詳言すれば人類が火を利用する上に於て、之を大別すれば光と熱と温度との區別を明かにし、其利用の目的に従つて火を作る方法に工夫をこらす必要がある。燈火は火の光を利用するのであるから熱の多少や温度の高低などは燈火の要素でなく、出來得るならば全然發熱せずに低温度の儘にて強き光を放つ物が理想的である。又多量の熱を必要とする場合と高温度の熱を目的とする場合とは一致する物ではなく、一を以て他に代へる事は不能である。例へば酸素とアセチリンとを燃焼せしめたる炎は非常なる高温度を有し、鐵觸るれば鐵を熔かし銅觸るれば銅を熔かすが故に、僅かに二三寸の炎ではあるが以て銅鐵板を切斷する事が出来る。然るに廣漠たる秋の野に燃え盛る野火は其熱量に於て天を焦がすに足る物ありとも一本の電線を熔かす事が出来ない物である。

高温度の火を利用する事を知るに及んで第二十世紀の文明人は其第四階段に昇つたと云ふ事が出来る。現今の工業界に於て大革命を起しつゝある物理的研究は種々あるが内に、高温度に於ける物質の變態に關する物は其重要な物の一つであつて、現今長足の進歩を成した金屬材料や煉瓦並に陶磁器類の改良は凡て必要なる高温度を自由に加減する事に依つて成功を収めたのである。是を要するに單に人類に限らず、凡ての生物の進化は火に依つて實現せられ無明暗黒は即ち死物界である。火の利用を知る事に依つて他の諸動物と區別せらるべき人類は、火の不可思議を認むる事に依つて宗教心を生じたのである。従つて吾人の祖先が崇拜した最初の物はアグニ即ち火の神であり、火種子を保存する必要上から家屋の建設を企て、團隊の共同作業を始め其任に選ばれた人物は即ち「ヒツギノミコト」であり、發火装置を以て千古傳來の寶物となして居る事は洋の東西を問はず共通な事である。

燈火の發明に依つて夜を晝と化した吾人は、新に火の利用法を發明する毎に文化の階段を一段宛昇つて行くのである。火を以て生命の根源とする吾人が、人生修養の極致たる神の本體として光を理想とするのは此故である。大和言葉にて男子の美稱をヒコと云ふのは火子の意で聖人をヒ

ジリと呼ぶのも火知りの意に外ならぬ。現代の學術上から見ても人類の開發程度を測るべきメートルは彼が如何なる程度まで火を知つて居る乎にある。従つて「暗黒を去つて光明に向へ」是が人生のモットウであらねばならぬ。

五三 ラブランド人訪問

草木も眠る丑の刻、月は三更の夜半なれど、流石は寒帯地方の夏の事とて早ほのくと明けそめて、汐路遙かの浦傳ひ、浦山懸けて行く程にストツクスンドの沖に出でたれば波も曇るや汐煙虚空に充ちて空吹く風も物凄く、海士の小舟も水鳥の影さへ今は消え果て、果てを知らぬ大西洋の荒波に漂ふ事約四時間の後にはネーレスンドの群島内に入り、波も漸く平かとなり甲板に出でて左右の島を眺むれば、凡て太古の層成岩にて圭角は概ね氷石の爲に磨滅し木目は各種の曲線形となりて頗る美觀を呈して居る。

船員「あれが有名なトルグハッテンでございます。あの山の麓にトルゲンと云ふ港がありますから其處で一寸淀泊します。」

三太郎「何で有名な處ですか、全で大きな蟹が波の上に浮いて居る様な形ですね。」

船員「山體の中央に大孔が貫通して居るので恐らくは世界に二つとありますまい。」

五九郎「山腹に大きな孔があると云ふのは爆裂火口でもありませんか。」

船員「火山ではありません、多分地震で迂り落ちたかも知れませんが、それも見えませんよ。」

五九郎「成る程、是は奇抜だね、山のこつち側に居乍ら山腹の孔を通して向ふ側の海が見えるな」

どは慥に天下無類かも知れんね。」

其内に上陸して登山して見ると、片磨岩の岩層が地殻の變動に際し横壓を受けて直立し、下海を破りて突出し一個の小島を構成したもので、中央の最高點は八百數十尺に達し、山の中央が斷層に依つて陥落し而も途中にて切れ、上部は楔形をなして其儘残り下部のみ更に沈みたるが故に、海拔四尺餘尺の山腹に自然のトンネルが出来たのである。

東口は少しく高くしてアーチの高さ約七十尺あり西方の入口を通じて内海中の群島を望見すれば恰も望遠鏡に向つて居る様な氣がする、西口はアーチの高さ二百五十尺に及び、幅は四十尺乃至六十尺で全長五百數十尺あり誠に天下の奇觀である。山麓にある猫額大の野原には名も知れぬ

紫色の花満開せる中に幾多の牛其處此處に寝轉び居り、少女は牛乳や莓などを販賣して居た。トルゲン港を抜錨して再び大海に出づれば、ワルチゲン嵐に海は鳴り山成す怒濤に浮く船の谷間に降る瞬間に奈落の底に沈むが如く、篠を亂して降る雨に日は暮れ果て、乗客は凡て寢室に逃げ込み、苦しき一夜も明けて見れば既にロフオーテンの群島内にあり、食後直にヂゲルムールに上陸し、千九百三年七月二十三日獨逸のカイザーが登山せられたる故を以て名所の一つに數へられる花崗石の山に登つた。頂上より群島を望めば御山より宮島を望むが如く松島にも劣らぬ佳景である。東に大陸の山高く聳え、雪の冠氷河の帯、ラフトゲンドの海峡は島嶼波に漂ひ一帯の綾錦の如く、左の方は長島の嶺嶺き、右西南を眺むれば太平洋の水は滔々として其涯を知らず。山麓は前世界の雜草が幾千萬年の間生えては枯れ、生えては枯れたる物積り積りて二三米の厚き層を作り今は泥炭と化して居る故に、土人は之を掘り日光にて乾かし燃料として居る。船中に歸りて食事を済ませたが、地方の貧民は小舟にて船の周圍に漕ぎ來り食事の残物を乞ひ得て喜び歸つた。是より北は群島内を縫うて航行するのであるから波平かにして恰も湖水の如く、昨夜の苦しみなどは全く忘れてしまつた。

船員「此邊の景色は全て瀬戸内海の様でせう。」

三太郎「本當にさうですね、全て日本に歸つた様な氣がします。」

五九郎「貴殿は瀬戸内海をご存じですか。」

船員「知つて居ますとも、私も今ではオーストラリヤのロイド會社に勤めて居りますが、以前にはドイツ船に乗り込んで居りましたので日本に十一回往復しましたですよ。」

三太郎「此邊の島は實に奇抜ですね、或者は材木を立て並べた様に屹立して居ると思へば隣には全て鰻頭笠を伏せた如き形の物がある。」

三太郎「是は嘗て烈しき地殻の變動があつて地層が縦に成つたり横に成つたり滅茶苦茶に攪亂された結果です、地層が直立して居る島は險はしき形となり地層が横になつて居る島が氷河で磨滅された物は鰻頭の様になり圓滑になるのです、其中間で地層が斜に傾いて居るものもあります、あの島を見給へ、あれなどは北から南に向つて地層が高まり南の端は斷層の爲に崖を成して居るよ。」

五九郎「兎に角日本では一寸見られない景色だね、瀬戸内海に似て居ると云つても島の形を一つ見ると全然違ひますから。」

其内に船はトロムズエーに淀泊した。此島は東西半里南北二里にて北緯六十九度三十八分に位するので七月盛夏の候でも氣温は五十度を越さないが、人口八千の小市街其東岸に軒を並べて居る。併し此處で土産物を買ふよりもドロンタイムカベルゲンで買ふ方が遙かに安價であると旅行案内に書いてあるから買物は一切見合せた。中學校教員養成所まである博物館に行つて見たが、寒帯地方の魚鳥類は殆んど集め盡くして居ると言つても良い。

三太郎「此處に日本の傘が一本陳列してあるよ。」

三太郎「成る程、傘などは珍らしいでせうよ、日本人は雨の降る日に紙で造つた笠を持つて歩く」と説明しても此邊の人々らは了解が出来ないからね、實物を見せる必要があるでせう。」

五九郎「それにして東洋第一の日本帝國を代表する陳列品が一本の傘では餘りに面目がないではありませんか。」

三太郎「もう一つ此處に日本の新聞が出て居るよ。」

五九郎「それは日本の新聞と張札には書いてあるが日本のではなく支那の新聞ですよ。」

三太郎「成る程、假名がない本字ばかりだね。」

五九郎「君は日本人だが其新聞は讀めますまい、日本人たる君が讀めないならば日本の新聞でない事は慥でありませんか。」

博物館を出て背面の岡に登つて見たが、住宅の門柱に鯨の肋骨を利用し其上に馴鹿の角を載せて飾りとして居るなどは如何にも北國特有の物で日本に在りては想像も及ばぬ事である。

三太郎「變な鳥が居るね、鳥は黒いものと思つて居たら此處の鳥は灰色ですよ。」

五九郎「頭と兩翼は眞黒だが形は鳥に似て居ても鳥ではない外の鳥かも知れんさ。」

三太郎「それでも鳴き聲は日本の鳥と同一ですよ。」

五九郎「北國は雪が大いから鳥も灰色になるかね、熊や狐は北極附近に行けば白くなるし兎などは日本内地の東北地方でさへ冬には白くなるからね。」

小艇に竿さして對岸トロムズダールに渡つた。三メートル乃至五メートルの白樺が密林を成して居る中を、南側の谷に沿つて山奥に分入る事約一時間にしてラブランド人の部落に到着した。土人の本名はラップでラップが住む土地をラブランドと云ふのであるが、更に其ラブランドに住んで居る土人をラブランド人と云ふなどは考へて見れば笑ふ可き話であるが、さう云はなければ

日本人には通用しないから止むを得ん。」

案内人「ノルエー國內に居るラブランド人の總數は二萬餘でありまして其内千七百程は今猶水草を遡つて移動して居る遊牧の民であります。スエデン及びロシアにも約一萬二千程居りますが、千九百五年の條約に依りまして夏季にはスエデンの方からノルエーの沿海地方に移り、冬季にはノルエーの者も又スエデンに轉住する事が出来る様に成つて居ります、彼等は何れも澤山の馴鹿を連れて移動するのでありますから、時々途中の永住者と面倒な問題を引き起す事があります。」

五九郎「なか／＼澤山の馴鹿を飼つて置く物ですね、二百匹位は居るではありませんか。」

案内者「平生は野放しにして居るので其總數は四十萬頭内外と云はれて居ります。今日は貴殿が見物に来る事を前以て通知しましたのでわざ／＼馴鹿を集めて柵内に入れて置いたのでございます。唯今繩を投げて逃げる馴鹿を生捕りにする技術を御覽に入れます。」

五九郎「頭から足の先まで馴鹿の毛皮で包まれた土人が、得意の妙技を振ふ様はなか／＼面白いですね。」

三太郎「土人は非常に背丈が低いと云ふ事を書物で讀んだ事があるけれども、格別小人と云ふ程

ではないですね。」

五九郎「吾々日本人から見れば小人でさいさ、身長は平均したら日本の田舎の百姓と大差はあるまい。然し露西亞人や英國人の如き白人は非常に背が高いから彼等白人から見れば小人に見ゆるだけさ。」

三太郎「顔色や身體の格好なども日本人そつくりでありませんか、ラツプと云ふのはフィンランド語で陸の奥に住む人と云ふ意味だと云ふからフブランドを意譯すれば陸奥の國で昔の奥州人とラブランド人は兄弟か知れんぞ。」

五九郎「野蠻人は一般に子供と同じ事で赤其他の色の濃いのを好むと云ふが本當だね。帽子や着物の襟、袖口などの飾は凡て色の濃い赤や黄の切れでありませんか。」

案内者「あれはラシヤの切れでありまして白人の交換したものです、土人には馴鹿が凡ての生活の要素でありまして帽子でも衣服でも靴でも馴鹿の毛皮で造り其肉を喰ひ脂肪は燃料又は灯火用として骨は器具の材料として使用します、彼等の祖先は東洋に住んで居たが年と共に西漸したものであると口碑に傳へて居り性質柔順で鬭争する事殆んで無く稀に他人の馴鹿を殺す位が唯一の

犯罪ださうです。』

五九郎『家と云つても随分簡単な物ですね、單に樹の枝を周圍から立て掛けた丈でありませんか』
三太郎『床もないのですね、眞中に爐があるだけで是では全く山岳俱樂部員の旅行隊が一寸野營した様なものでありませんか。』

五九郎『澤山鳥獸の肉を喰ひ毛皮の類で衣服を作る人類が綿服を纏ひ菜食する人類よりも優等である様に考へて居るものに此ラブランド人の生活状態を見せたいものですね。』

案内者『周圍に柴の枝を並べた毛皮を敷いて寝るのです、其處に大きな皮の袋がありませう、其中に彼等の全財産がしまひ込んであります。』

五九郎『此處には赤子が吊されて居るよ、お人形かと思つたら生きて居る子供ですね。』

三太郎『成る程顔だけ出して全部毛皮で包み全で蛹か木乃伊の様な格好ですね、是では大小便はどうするでせう。』

案内者『尻の處は皮に孔があけてありますから差支ありません。寒いものですからそんな風に包み切りにして置くのです。大人でも同じ事で彼等は着物を一度着れば破れる迄着換へる事など無

いと云つても良い位です。』

三太郎『入浴はせんのですか。』

五九郎『入浴などは西洋人だつて一年に一度か二度位な物で毎日湯に入るなどは日本人ばかりですよ。』

三太郎『男子はさうでもないが婦人が入浴をせんでは困るでせうね。』

案内者『婦人と云へば此處の土人は月經中には決して魚を乾かす海濱を歩いてはならんと云ふ規則が嚴密に實行されて居ります、若し是を犯せば其海邊では魚が採れなくなると信じて居るさうです。』

三太郎『月經に關しては種々の迷信が世界の到る處にあります。現今の文明人間には此迷信が次第に衰へて將に盡きんとして居ると云ふ事だけは慥ですか、例へば日本人だつて月經時の婦人が梅干を漬ければ腐敗すると信じ西洋の白人は月經時の婦人が醸造場に入れば麥酒は酸性を帯びて酢の如く變化し月經時の婦人の手で作つたジャムは容易に腐敗し若し櫻桃の樹に月經時の婦人が登れば其樹木は枯死すると信ぜられて居ります。』

五九郎「夫れは要するに月經時の婦人がそんな場所に立ち入れれば飲料や食料を汚す事に成り易いからつまり夫れを戒めたので衛生上からは必要な事柄です。」

案内者「北米の極地に住むエスキモー人も月經時の婦人を以て不淨の甚しき者となし日中は外出を禁じ男子が萬一不淨の婦人に近寄れば凡ての動物が其男子を遠方から見得る様になる故に獵は不成功に了ると信じて居るさうです。」

野蠻人の間に自然に生れたる思想は社會の進化に従ひ神の暗示に依る物として或は神から授けられたる經典として宗祖に依り宣傳せられるのが普通である、太古時代に於ては宗教家の信する如く神が直接に人類と對面せし乎或は單に人類が自己の心中に無意識に顯はれたる者を神の言葉と認認したのであるかは問ふ事を止めても月經の不淨は各地の立法者に依つて等しく宣傳せられて居る、即ち造物主ブラマより直傳を受けたといふ印度の立法者は月經時の婦人に按すれば才能も智力も視力も衰弱すると説き、ヘルシヤの立法者は最上の神たるマツダより口授せられたりといふ經典の内に不順の月經は惡魔の作用である、従つて月經中の婦人は惡魔の力を有するが故に行者より離れ聖火を眺めず、萬一飲食すれば魔力増大する故に之を禁ぜよと説き、ブリウ人たる

セモスも亦更に詳しく其恐るべき事を説法して居る。

五四 ユダの焼打

案内者の語る處に従へば此處の土人には面白い神話がある。昔或る時一人の巨人が襲來して土人を殺し其妻を掠奪して行つた。土人の子が成長してから父の仇を報じ其母を救はんとしたが刀も鐵砲丸もかの巨人には無効で恰も肉體以外に離れたる彼の生命である如くいくら肉體を切つても彼を殺す事が出来ないものと認めた。其處で子供は其母に尋ねた、巨人は自己の生命を其肉體以外に秘藏して居るに相違ないから何處に置いてある乎を知らして呉れと、母は勿論そんな事を夢にも知らずに居たが何れ折があつたら巨人に質問して見ようと約束した。或日巨人が非常な上機嫌で居るのを幸に母は其生命の在り場所を聞いて見た、巨人の答ふる處に依ると、燃え立つ海の遙かに一つの島があり、其島の洞窟内に一つの樽が秘藏してある。樽の中には一匹の羊が居り其羊の腹中に一羽の鶏が居り、其鶏の卵の内部に私の生命を秘藏して居るものであつた。母から此物語を傳聞きした子供は日本一の桃太郎の如く熊と狼と鷹と鶴とを供に連れて鬼が島征討に出

掛けた。彼は鷹や鵝と共に船の真中に健てられた耐火的鐵骨煉瓦のテント内に起居し、熊と狼とは漕手の役を勉めて熊や狼の毛が今日も猶あんな色になつて居るのは此時燃え立つ海の焔に焦けた故である。恐ろしき荒海を乗り切つて鬼が島に上陸した彼等は難なく樽の置き場を探がし出し熊が其前足を以て一撃を加うると樽の鏡は忽ち抜けて中に居た羊が逃げ出した。側に見て居た狼は逃がすものかと其後を追うて之を八つ裂きにした。處が案の如く一羽の鶏が飛び出した空中高く見張つて居た鷹は忽ち之を捕へた處が苦しきまぎれに産み落した卵は海底深く沈んだ、其處で鵜は直に水中深く卵の後を追うて潜り込んだが途中で苦しくなつたので二度迄も失敗して空しく海面に浮んで来た。大決心を以て三度目に潜り込んだ時始めて卵を海底に見出し是を若者に獻上した。彼の喜びは例ふるに物もない程であつた。直に大なる篝火を海岸に燃やし卵を其内に投げ込んで歸航の途に就いた。めでたく歸朝して旅装の儘巨人の家に行つて見ると不思議なる哉、巨人は生不動の如く猛火に包まれて苦しみ乍ら一婦人の愛に溺れて一生の秘密を明かしたのは残念であると呼び、幸福の目に飲み慣れた人間の生血を以て造れる酒を飲まんとして鐵管に口を當てたが、此時婦人は鐵管の他端を酒樽から外して爐の中に突き込んだ故に、憐むべし巨人は火と

灰とを吸ひ込み肉體の内部からも外部からも火攻めの苦しみに逢うて五體と共に彼の生命も亦燒き盡されてしまつたと云ふのである。

三太郎「巨人と云ふのは白人の事だ、日本でもシヤモがアイヌの婦人を掠奪するので女が一人前になれば入墨をしてそれを防ぐ風習が出来たと云ふからね、大江山酒香童子の話なども似寄つたものですね。」

五九郎「私の郷里では正月の祝ひに門前に火を燃やす舊習があり、其際に團子を其火焰の中に投げ入れて焼きますが今のラブランドの神話と何か關係があるらしい様に思はれるね。」

船客丁「私の國では正月にベルテイン祭と云ふ火を燃やすお祭があります。スコットランドでは神は宇宙を家として如何なる場所と雖も居まさざる所なきものである故に人工に成れる建造物の内に之を祭るは神を穢すものである、宜しく青天井を祭場として野外に大々的の祭典を行ふ可き筈であると思はれ、此火祭は附近の小高き丘に於てしますが此際に神前に捧けたる供物を集まりたる人数だけに等分し、其内の一個を黒焼きとし全部を袋に入れて各員は眼を塞ぎて其内の一個宛を任意に取りあげ黒焼きの菓子を得たる物は火中に投げ入れられる事に成つて居ります。」

三太郎「人間を火中に投ずるのですか、英國でも田舎に行けば亂暴な事をするのですね、夫それは多分昔、神を祀る時、人身御供に實行した遺風かも知れんよ。」

船客丁「昔は本當に火中に投じたかも知れませんが今では單に投げ入れる眞似をし或は其人が三度火を飛び越えて儀式を了るのであります。インバネス町では此際に、

『火よ燃よ、惡魔を焼けよ、火よ、火よ惡魔を焼けよ』
と合唱する風習があります。」

船客乙「獨逸のバワリヤ地方ではそれに似寄つた火祭が春の初にあります。ユダの焼打と云ひまして丘上に大なる十字架を作り之に麥蕎其他の燃料を結び附けて恰も人が兩手を擴けて立ち居る形にする、地方の若者がそれも十八歳以上の壯丁のみが其周圍に圓陣を作り命令一下徒競争となり第一着の者が、之に點火するの名譽を荷ふのであります。多くの地方では小さき人形を作りて是を火中に投ずるのが普通であります。」

三太郎「假令ユダヤはキリストを賣つた者であると言つても汝の敵を愛せよと教ゆる者が敵の人形を作りて毎年之を焼き殺す儀式をやるなどは不都合ではありませんか斯うなつて來るとキリス

ト教もあてに成らんですね。」

五九郎「それは必ずしもキリスト教の祭式ではありませんまい、キリスト教以前から迷信的に行はれて居たる惡魔退治のお祭をキリスト教に成つてからも廢する事が出來ずに名目だけを變更して繼續して居るのさ。」

本日は恰も埃國の天長節に當るので埃國に船籍を有する我等の船内では大夜會が催された。佛國の酒や印度の菜物は勿論の事、世界各国から集めた海山の珍味に飽き船長の發聲にて先づ埃國皇帝陛下の聖壽を祝し、奉り次にはウケンナ大學教授の發聲にて日本語を以て我が日本國皇帝陛下の萬歲を叫び、衆皆我に向つて乾杯せられたるは最も光榮に感ぜられた。酒宴終れば舞踏始まり白熱燈の光に輝く珠玉の裳裾、手弱女が踏み鳴らす靴の音もピアノの調子も賑かに舞樂の聲は空に充ち狭谷に響き寒帯に特有なる日没後の寂光に冷々たる波路を分けて漕ぎ來る幾多の小舟は近郷近在の老若男女に充ち時ならぬ眺めにあこがれて居る。

五五 世界最北の市街

故郷では八月盛夏の候であるが、流石は寒帯地方だけにトロムズエーを解纜し、ノルエー國の西岸に沿ふて北航すれば、何れの島も大陸も小高き處は見渡す限り雪に掩はれ雪の盡くる所より白糸の如く海中に流れ込む懸河は恰も海神糸を紡ぎ居る乎と疑はれた。北緯七十度十五分に於て公海に出で、遙かに來し方を顧れば右の方アルネー島にも左の方大陸にも棲き氷河蛇々として長蛇の如く海中に突入し居るのが眼に附く。ロツベン島邊では多少の馬鈴薯を産する以外は農産物が無いと聞いては能くもそんな寒地に住めるものであると云ふ考が浮ぶ。此邊から航路を東に轉じたが太陽は南の方大陸の山の端に輝き北氷洋上の諸島は霧に包まれ、海濱の苔は飽く迄青く海水は綠色を呈せるを背景として虹の懸かれる様殊の外面白く見られた。

世界最北の市街と稱せられるハンマーフェスト市に上陸したのは午後四時である。第十九世紀の初年には人口僅かに七十七人であつた。北海の漁村も今では二千數百を算する迄に發達して居る。五月十三日に出た太陽が七月二十九日迄は没しないのであるから我等の如き夏季の旅行者には甚だ結構であるが、冬季に到れば十一月十八日に没した太陽は翌年の一月二十三日迄は出て來ないのであるから當地に永住する者に取りては災難である。

十月に入れば寒氣襲來と同時に一日銀世界と化し、一日一日と晝が短くなり、太陽が南の空に一す顔を出した乎と思ふ間もなく山の端に隠れ竟には全く太陽を見る事が出来なくなつた時の心細さはどんなものでせう。何時に成つたら再び太陽が出て來るか、或は永遠に暗夜が續くのではあるまい乎、太古の野蠻人には其判断が出来ぬ筈である。日本の神樂舞や、天の岩戸の故事は斯の如き寒帯地方に來て考ふる時眞に其面白味が出て來る。數日間暗夜の下に苦しんだ者が始めて日出を拜し太陽の光に照らされた場合を想像して見るが良い。晴天白日是程愉快な事はあるまい。自然に支配された吾人の祖先が陽太を最上の神と崇拜したのは當然である。然るに科學的文明の發達は其支配權を太陽から奪つて吾人の掌中に收めてしまつた。即ち世界最北の市街にも二十世紀の今日では發電所が出來て暗夜の地は不夜城の市街と化したのである。

家屋は全部木造ではあるが道路は可成り整理され裏屋には燻製鮭や其他の魚類が山の如くに積まれ店頭には立派な白狐や北極熊の皮が數限りもなく吊されて居る。此地は英國の領事館があるの一事に依つても如何に重要な商業地であるかは推察せられる。

市街地を東に行き灣に沿うて北に廻りて見ると細長き半島形の陸地が西に向つて突出し灣を圍

んで居り。其中央には花崗岩の柱が建設されブロンズ製の地球儀が載せられてある。

三太郎「あれが子午線測量の記念碑か、地球儀とは適当な考案だね。」

五九郎「單に地球儀を置いただけではつまらんよ、此地球儀の地軸の方向が大切なんです。丁度天頂を向かすに少し傾いて居るでせう。此軸の方向が天の北極を指すので太陽は其周圍を毎日一回宛廻轉するのです。」

三太郎「流石に理學者達の建ての記念碑に合理的ですね。何時でしたか成田山の不動尊の參詣した際に日清戦争の紀念の爲とか云つて某工學士の設計になる大地球儀が奉納されて居るのを見た事があるが地軸の方向などは少しも考へずに置いてありました。」

五九郎「それですから一寸した事でも理學の思想の有無は直に看破されると云ふのです。盲人同志ではお互の顔に墨が附いて居るのかも知らん得意に氣取つて居るが目明きから見れば噴飯にたえない様な物です。」

臺石には次の説明が彫刻されてある。

國王オーカール一世、皇帝アレキサンダー一世及び皇帝ニコラス一世の命に依り千八百十六年

より千八百五十二年に到る迄、フルエース井ーデン、及びロシヤ三箇國の測地學者が不斷の努力を以て測定せる北海よりドナウ迄、即ちハンマーフェストよりイスメールに至る貳十五度二十一分間に渉る子午線の北端、北緯七十度四十分十一、三秒、千八百二十三年エドワード、サビネ此點にて有名なる振子觀測を成せり。

三太郎「樺太の日露境界は北緯五十度ですから北緯七十度四十分と言へばつまり沖繩邊から樺太に行くだけ更に樺太から北に行つた事になるのですね。そう思ふと我々も可成り北に進んで居ますね。」

五九郎「日本から見れば可成り北であるが北極は北緯九十度ですからつまり樺太から北極に行く途の半分だけ進んだ勘定になるね、まだ一前途遠遠ですよ。」

船客甲「子午線測量と云ふ事は何故大事業なんですか。」

五九郎「地面が平であると考へる程の人は今の時代に居ないとしても地球は球形であると云ふ現代人の考も亦非常に粗雑な考なんです。千六百七十二年に佛國のリシエーと云ふ學者が南米に出張して振下時計を見たるに佛國では正確であつた物が毎日二分宛遅れる様になつた彼は其原

因を重力が弱い爲であると考へた。何故に重力が弱くなる乎、ニュートンの學説に従へば地球中心から距離が遠い所は重力が弱い筈である。其處で佛國よりも南米は地球の中心から遠いのであるまいかと云ふ事に成る、果して然らば地球は球形ではない。従つて赤道附近と北極附近とは緯度の差一度に對する子午線の長さは同一であり得ない筈である。此理論を検證し且地球の眞の形を知るには子午線の長さを實測するより外にない筈ではありませんか。

三太郎「成る程、子午線の長さを實測して地球の周圍を知つたのですね、赤道から北極迄の距離の千萬分の一を一メートルを定めたこと云ふ事は學校で聞いて居ましたが。」

高地に登りて北の方を望めば北氷洋は漫々として境もなく水は滔々として波は悠々たり、午後六時再び解纜し東北に向つて航する事約三時間半にして一孤島がある、氣笛一聲續いて一發の砲聲を聞いたので何事かと驚いた。船客は期せずして甲板に集まつた。彼の孤島を見れば無数の水鳥が砲聲に驚いて空中に飛散したと言ひ、海洋中の孤島であるから此處を去つても往く可き場所がないので再び舞ひ戻り、忽ちにして島の白くなる様は恰も雪の降り積るに似て一奇觀たるを失はない。一發の砲聲は此奇觀を船客に見せしめん爲に船長の好意を示したもので、太平の夢を

破られたる水鳥には誠にお氣の毒であつた。

五六 氷 山

太陽は北氷洋の波に隠れても寒帯地方の特性として夕の空は暗くならぬ、午後十一時を過ぐる頃、寄せ来る波に洗はれて海と空との間なる楔の加き形して險しくも亦凄まじく屹立して居る北岬が見えた。北緯七十一度十分二十四秒に位し歐洲の最北端と稱せられて居る、其鼻を廻りてホルンキツク灣に投錨し直に上陸した。

三太郎「午後十二時と云へば夜半なんだが是では少しも夜らしくないですね。」

五九郎「それが即ち北極旅行の北極旅行たる所以さ是から何日間かは全く夜がないのですから面白いでありませんか、其處の岩に何か書いてあるよ。」

三太郎「此處に寄航した船の名と年月日らしいです。」

五九郎「それでは吾々も一つ記念の爲に日章旗を書いて置かう、幸日本墨を持って来たから」

三太郎「帝國の萬歳を唱へやう、實に愉快だね、斯んな北の果てにも日本にある様な草があるか

ら面白いわね。」

五九郎「成る程、すみれもあればたんぽぽもあるねそれはすぎなでせう。八月中旬だと云ふのに至る春の初めの様な景色ですね。」

標高一千尺の斷崖を岩が根に縋り乍ら四つ這ひになつて右に折れ左に曲り約一時間の努力の後に登り切つて見ると可成りに廣い平野がある、一面皆灰白色なる片府岩や雲母岩などの破片で積み上げられて居る内に純白なる石英の破片が點在し遠くから見ると鹿の子まだらに消え残りたる氷雪かと疑はれる。雲霧かすかに天空を掩ひ鳥も飛ばねば蟲も鳴かず全宇宙が沈黙其儘の如き觀があるけれども決して死の世界ではない。昔や二三の高山植物は彼處にも此處にも生え茂り直徑二分か三分に過ぎざる濃色の花が時を得顔に開いて居り是を採集する婦人の霞にまぎれてほの見ゆる有様は春野に花を供ふる天人かと疑はれた。

フロラ嬢「五九郎さんは私の妹でリシーと申します宜しく。」

リシー嬢「今頃姉さんに紹介して頂かんでも良いですよ、ベケゲン見物の際からお近づきになつて居るのです、ね、五九郎さん。」

フロラ嬢「オヤさう、油斷が出来ないね。」

五九郎「御兩人ともお疲れになりませんか、あの急な坂を登るのは男でも苦しいですよ。」

リシー嬢「それ程でも御さいません、ほんたうに面白い景色ですね、あちらの方迄行つてご覧なさいませんか。」

五九郎「お伴いたしませう、山水の景色は伊太利の方がまだく面白くありませんか。」

リシー嬢「それは私の國にも面白い景色は澤山ございますけれど夫と是とは種類が違いますわ。」

五九郎「ナポリから南の方カラブリアに到る伊太利の沿岸は魏峨たる山岳直に海水の中より起り大波は岩を呑み小波は岸を洗ひ、昔を偲ぶ古城址は彼處に二つ此處に一つ夕陽に照らされて居るなど、其佳景は今でも眼の前にちらついて居りますよ。」

リシー嬢「私の國がそんなにお氣に召したなら歸りに復たお寄りなさいな、私もご一所にお伴いたしますわ。」

平野を進む事十分ばかりにして岬の極端に達した。伏して脚下を眺むれば海拔一千餘尺の斷崖は削りたるが如く、仰いで北方を望めば北氷洋の水濱々として萬里の滄波を疊み、後を顧れ

ばマーゲル島の高原皚々として千古の氷雪を載せ、西南に天晴れて東北に海靜かなる佳景に見とれて居ると次第に濃霧襲ひ來りたれば急いで逃げ歸つた。

午前四時北岬を解纜して後は北氷洋を横斷し北へ北へと航海を續けたのであるが、島影などは一つも見えず唯々萬里の滄波のみ、明け暮れの境もなければ時計をたよりに朝夕の食事を取り、夜もなければ疲るゝ儘に晝寢をし談り明かし話し暮らす事幾日、

船員「氷山が流れて來ましたよ。」

三太郎「それは面白い。何處にありますか。」

船員「前の方左手遙かの處に雲か山が見分けのつかん物が見えませう、あれが氷山です、今に船の近くに流れて來ます。」

三太郎「成る程、あれが氷山かね、綺麗な物ですね、青色でもなく緑を帯びた様な而も半透明な山、全て水晶宮にある築山とでも云ひたい様なものだね。」

五九郎「北極附近から遙々此邊迄流れて來る間に柔かい雪の部分は何て解けてしまひ、堅氷のみ残るからあんな面白い形が出来るんだね。」

船員「此先に尖峰島と云ふ島がありますから、其東側から北極に向つて進み歸りには西側を戻る事にすれば面白いのでありますが、尖峰島は北緯約七十六度半から八十度半に渉る群島で最大なるは其面積二千五百方里もあり、其南部には海拔四千五百餘尺の高峰櫛の齒の如く並び、北部は千五百尺乃至二千尺の氷原あり、其東北にある面積一萬里程の島には厚さ二千尺乃至三千尺の氷層が内地を掩ひ、次第に流れて海に注ぐ所は幅員五十里もあります、故に天候の加減で其處から碎けた氷が此通り氷山となりてどしどし流れて來ますので、危険ですから尖峰島の西岸に沿つて前進する事に決定しました、もう一日も進めば島が見えます。」

三太郎「八月 中旬と云ふのに全て大寒の様な寒さには驚いたね、是では避暑旅行も少し極端で一寸避寒にでも行きたくなつたね。」

船員「今年は是でも天氣が快晴ですからこんな暖かいのです、此以前に來ました際などは大雪で僅かの間に雪が三尺も甲板に積つた事がありましたよ。」

五九郎「それは面白いね、一度はそんな事が無いと話の種にならんよ、折角北極に來たんだから。」

船員「貴殿方はそんな香氣な事を云ひますが本當に天候險惡になつたら大變ですよ。生命に關す

る大問題ですからね、假に風が全然ないにしても降雪や霧で前方の見透しがつかなくなればもうおしまひです。』

三太郎「其時は停船して休んで居れば良いでせう、大連から門司に渡る時一度経験したわね。』

船員「日本あたりではそれでも済むが此處ではさうは行きません、氷山が流れて来るから駄目です、氷山と云へば面白い昔話がありますよ。』

五九郎「リシーさん一寸いらつしやい、今面白い昔話が始まる處です。』

リシー嬢「日本のお話ですか、日本の昔話つて未だ私は聞いた事はありませんがきつと面白いでせうね。』

五九郎「私が話すのではありません、此方が氷山の話をなさるんださうです。』

船員「私の話ではつまらんかね、五九郎さんでなくつはおあいにくさま。』

リシー嬢「まあ！人がわるいわ、そんなに冷かすものでありませんよ。』

五九郎「さあ、氷山の話を願ひしませう。』

船員「今は昔の事、ハンマーフェストに一人の漁夫がありました、生國はデンマルクで名はアン

ダーセンと云ふのですが北氷洋上で澤山の獲物を積んで居る露船に出會ひ、露人を刺し殺して其荷を奪ひ歸途に就いた。所が其知人にてトロムスエーに居るスチウエルと云ふ漁師が偶然波に漂へる露船を認めて調査したるに、露人に刺した船にアンダーセンと云ふ名が刻まれて居たから、其後沖合にて彼に出遇つた際にそれとなく露船の話をした。アンダーセンは自分の舊惡路顯を恐れてスチウエルの小舟を破りて逃げ歸り、スチウエルは不幸にして破船したと其妻子に物語り、多額の香奠など贈つて再び航海に出掛けた後にスチウエルは他の漁師に救はれて無事に歸つたから、アンダーセンの悪事は残らず世間に知れてしまひました。』

リシー嬢「海賊のお話なんですか。』

五九郎「氷山と何か關係があるのかも知れんからまあ聞いて居ませうよ。』

船員「北氷洋遙かの沖に漕ぎ出たアンダーセンは圖らずも氷に閉ぢ込められて漕ぎ戻る事も叶はず、船を捨て、氷の筏を飛び廻り、最も高い氷山の絶頂に登つて四方を眺め毎日々々助け船を探がして居りましたが、突然山は大震動海は怒濤を上げたかと思ふと氷山は忽ち海中に倒れ、罪深きアンダーセンは奈落の底に沈みましたとさ。』

「リシー嬢」氷山は鯨の様に突然海の中に潜り込む事があるでせうか、信ぜられないお話ですね。」
船員「鯨の様に潜り込むものではありませんが、氷山は海面上に出て居る部分よりも海水中に隠れて居る部分が七倍も八倍も大きいのです。それですから氷山から可成り離れて居つたつもりでも船腹が氷山に衝突する事があります。其隠れて居る部分が暖流にでも會ひますと、急に溶けますのと下部が二つに割れでもすれば平均を失つて氷山は倒れる事になる筈です。」

五九郎「中央アメリカから来る暖流は、英國の沿岸を通つて此邊迄来て居るからそんな事があり得るかも知れんね。」

「リシー嬢」それにしては其氷山が倒れて其處に居つた唯一人の漁師が海に沈んで死んだのでしたらそんな事がない筈がないでありますまい。」

五九郎「誰も見た人が居ない筈ですから今のは出駄羅目の作り噺であると言ふ事になりますね。」
船員「宗教家の説教にある地獄や天國の噺だつて同じ事です、つまり肉眼で見える事は出来ないから天眼通の者には知れるさ。」

斯んな話をして居る間にも大きな氷山や小さな氷山が左や右を通つて流れて行つたが、突然一
の空砲が鳴り響いたので船客が我先にと甲板上に集まつて来た、それは遙かの沖合に大鯨が一匹出現した事を知らせる合圖であつた。

五七 夜半の太陽

午後五時過ぎには右舷遙に尖峰島の一部が見えて来た。近づくに従つて削りたる如く尖りたる幾多の高峰雲を突き立て屹立せる間に、褐色に見ゆるは高原の氷雪が砂石と混ざるべく、白蛇の如き氷河の海中に突出せる部分は、純白にして青緑色を帯び、銀光を放ち、天は雲に掩はれたれども水際は能く晴れて太陽は西天に低く輝き、金波銀波相錯綜して其佳景言葉にも筆にも表はし得ざる物がある。

三太郎「廣漠たる海洋では雲がないけれども、陸のある處殊に高山のある地點には常に雲があるのは妙ですね。」

五九郎「それだから昔は能く雲を望んで聖人の在る場所を探がし出したなど云ふ記事が残つて居るのさ、遙か向ふの天空に雲が見えるでせう、あれなども必ずその下には島がある證據です。」

嘗て佛國の北極探検船レセルシ號が発見したレセルシ灣に投錨し、小艇に乗り移りて東氷河の河口に漕ぎ附けたのは午後十一時であるが日没後の夜に非ざる事勿論である。河口の氷は海面上に懸はれ居る都分だけでも數間の厚さはあるが、海中に沈める部分は勿論知る事が出来ない。流下するに従つて其先端は碎けて海水中に浮游するのであるが、小なるは筏の如く、大なるは氷山の如く、幾多の水鳥や海豹などが其上に戯れて居る、灣内を一週して淺瀬に上陸し、山を越え氷河探検に出掛けた。

三太郎「氷河と云へば恐ろしい様であるが、實際氷河の上に来て見れば普通の平地と變らぬです。ね。」

五九郎「無論さうさ、我々人類は一般に熱帯や温帯に發達したので水を液體として見慣れて居る故に氷を特別扱ひするが、萬一氣温が常に二千度以上の世界であつたら鉛や銅は勿論、普通の岩石も概ね水の如く液體となり河となり瀧を作るのであり、若又反對に氣温が常に零度以下の世界に行けば水は凡て氷結するから普通の岩石と異なる處がなく、水晶の様な綺麗な岩石として賞揚される筈でせう。氷河と云ふのはつまり氷で出来て居る地盤が少しづつ滑り落ちて行く場所に過ない

ので、日本の内地には毎年地滑りのある地方がいくらかもあるでせう、理窟はどつちも同じ事さ。」

三太郎「此處には小川があるよ、氷河の上に更に水の流れて居る河があるなどは内地に居ては一寸思ひも寄らん事だね。」

五九郎「氷を東北地方ではスガと云ふが水岩の略稱でそれが學術的に正當な名稱なんです、一種の岩であるとするれば其水岩から出来て居る地盤の上に川があつても不思議でないさ、然し斯う云ふ川は綺麗だね、兩岸も中島も凡て圭角と云ふ物がなく水が濁る筈もなし、水晶宮の庭に泉水があるとしたらこんな物だらうね。」

三太郎「此處に龜裂があるよ、窺いて見給へ、底が知れないで薄蒼い光が見えます多分是が地獄の底を割れて居るのかも知れんよ。」

船員「斯う云ふ龜裂があるから氷河探検は危険なのです、一度落ちてしまへば二度と此世に出る事は出来ませんからね。」

五九郎「氷漬になつて居るから何時迄も腐らずに居る、幾億年かの後に未來の古生物學者が発見して珍らしい前世紀の動物が見附つたなんて大騒ぎするかも知れんぞ。」

船員「今日の様な上天氣の際にはさうでもありませんが、若し霧が懸かりますと割目の方向が見えないから、何處も何處も同じ割目に出會つて進む事が出来なくなつたり、若し又大雪にでもなれば割目を知らずに踏みはずす恐れがあるから心配ですよ。」

昔何とか云ふ坊さんは餘りに睡眠を催して修業の妨げになるから、眼玉を抜き取つて捨てたと云ふ噂を聞いたが、眼があるの故を以て睡眠が必要であるものならば同じ論法で夜があるから寝るのである。夜さへなくなれば晝寝などはせんでも済むと云ふ議論が成り立つかも知れん。或は又太陽が正南に來た時に晝食を済まし、直に飛行機に乗つて西へ西へと太陽と同じ速度で飛んで行けば、何時迄も日が暮れないから晩食の必要はないと云ふ學者があるかも知れん。併し事實は是等の凡てを裏切りまして、夜はなくとも睡眠の必要もあれば日出や日没が無くとも朝飯や晩飯の必要がある。只太陽は四六時中天空に輝いて居るのであるから何時に寝ても晝寝をした事に成り、朝飯と晝飯との區別は必竟するに料理の種類に依つて判断するだけである。

晝夜なしの遠征に勞かれたから氷河探検を終へて暫時晝寝をして居る間にも船は休まず北極に向つて進んで行く、正午頃に海拔二千四百尺の死人岳を左舷に見てザッセン灣に寄航したが、北岸

の山谷は氷雪で埋められて居るから其南岸に上陸した。海岸近くに二三間程は砂礫にて次は約一
間程の高さにて數町の濕地が擴がり、凹處には水が溜まり苔を生じ凸所は地面が露出して居る、濕
地の盡くる處は一帶の残雪を認め、其先は山腹にて泥土と泥板岩の破片との混合物が熔岩流の如
く山上から流れ落ちて居る。山は高いと云ふ程でもないが無人島であるから登山の道などは勿論
ない。嵯峨たる岩石は胸を突き、而も風化作用に依つて岩塊甚だ不安定に、一塊足に當りて轉
すれば萬塊之に伴ひて轉じ、或は途上に堅氷横たはりて一度踏み誤れば千仞の谷底に落下するの
恐れある。故に一步毎に階段を刻みて之を涉り、右に折れ左に涉り休むこと幾度、漸く絶頂に登
りて前方を望めば雲霧かすかに夜半の太陽を隠し、六合肅然として聲なく海水は緑に色附けたる
牛乳の如く氷筏や氷山にて埋められ左右を眺むれば大小の氷河谷底を這ひ廻り、後を顧れば萬
古不滅の白雪に掩はれたる高原は其際を知らず、既にして霧晴れれば夜半の太陽は北天に輝き
金波洋々、詩人テグネルは嘗て歌つた。

眞夜中に日は西の端に輝けり

血潮の色に空を染め

夜とは云はれず晝ならず
嗚呼類なき景色かな

三太郎「あんな處に家があるよ。こんな雪と氷ばかりの島にも人が住んで居るのか知ら。」

船員「英米兩國の鑛山會社で石炭を掘つて居るのであれば坑夫の家です。此島は普通の地圖には載つて居ない程北の果てにあるので、元來は無所屬島でありますが近年は石炭を産出する事が知られたので、英、米、露、丁、諸の各國が其所有權を主張して居ります。兎に角今の處では何國の領分とも定めずに勝手に石炭を掘つたり漁獵をやつたりして居ります。」

五九郎「此島は第十六世紀の末に和蘭の航海が全盛時代に二萬五千グルデンの懸賞金を以て三組の北極探險隊を送つた際に發見された物で、尖りたる峰が幾つも幾つも並んで雲を突いて居る所から尖峰島と名附けたのです。」

船員「此島の近海には鯨其他の魚鳥獸多く、陸上は白熊や白狐が澤山居るので歐洲各國人が競ふて漁獵に出掛けて来る、殊に馴鹿の多い事は驚く程にて、第十九世紀の中頃に至るまでは夏季數週間の中に年々歳々二千頭内外の馴鹿を捕獲したさうです。」

三太郎「住めば都と云ふけれどこんな處に良くも永住出来るものだね。」

船員「此島で年を越す事などは無論出来ません。通常は七月に出掛けて来て九月には歸るのです。唯今お話の和蘭からの探險隊なども途中で氷雪に鎖され、止むを得ず冬籠りをしたがるが靴も着物も凍り、小屋の周圍には狐や熊が襲ひ來るので之を銃殺して肉を喰ひ毛皮を着て兎に角冬期の九箇月を過ごしたが、船は嚴寒の際に氷に押し潰されたので歸る事も出来ず竟に病死したさうです。」

三太郎「例のアンダーセンの昔噺同様でそれを見た人が居なければ知れる筈がありますまい。」
船員「それは千八百七十一年にノルエーの探險者カールゼンと云ふ者が其假小屋に行つて遺物を拾ひ來り、更に不歸の客となりたるバレンツが自筆にて探險の結果を認めて其小屋の内に埋藏して置いたのは、英人ガルヂナーが發見したので故人の功績が後世に傳はつたのです。其報告書は和蘭のヘーグ市なる海事博物館にあるさうです。」

五九郎「永遠に氷雪に埋められて居るこんな島から石炭が産出すると云ふのは面白いですね、石炭は太古時代の植物が變質したのであると云ふから、嘗ては北極附近の此島にも植物繁茂し鳥鳴き花開いた時代があると云ふ事になりますからね。」

斯んな話をしながら山を下り船に歸つたが、海濱の濕地なる昔の花は今や満開で其他色々の草が黄や赤や何れも頗る濃色の花を附けて居るのが眼に付いた。七月雪が消ゆるのを待ちて芽を出し八月に花を開くが、下旬には平均氣温が氷點以下となり九月には降雪を見るのであるから、遅くも九月初迄には實を結ぶの必要があるから此島の植物に取つてはなか／＼開はしい生活である。従つて樹木などは勿論なく草と云つても莖が延びる餘暇がないので殆んど根と葉と花があるだけである。食欲と色慾以外に何物をも有せざる一種の生物と云ふ事が出来るかも知れん。

五八 北極探検

北緯七十九度半迄進んだ頃、來し方を顧れば前島は雲際に孤立し左舷に近く七氷山は長蛇の如く波濤を破りて屹立し櫛の齒の如く並び立てる尖峰は概ね雲に包まれて居る。間もなくビルゴ灣に投錨したが米國飛行家エルマン氏來りて會食した。千八百九十七年七月十一日ス井ーデンの探検家アンドレー氏が自由氣球に乗りて此島を出發し、北極探検に赴き竟に不歸の客となりたる遺跡であるが、エルマン氏はシカゴ新聞社の後援に依り飛行船にて北極探検を企て明朝午前

二時に此島を出發する豫定なのである。食後は氏の案内に依つて飛行船兒物に出掛けた。

エルマン「船にて漕ぎ行けば氷雪海を埋めて居るから船を北極まで進む事は出来ません。北極犬に橋を引かせて行けば氷上の所々に大龜裂がありますから之を越ゆる事が出来ませんので、私は空中から北極に向つて飛び込む考へです。」

五九郎「嘗てアンドレー氏も其考で出掛けたが不成功に終つたのは残念でしたね。」

エルマン「輕氣球では風次第で何處に飛んで行くか知れないのですから失敗するのは當然です。私のはご覺の通り飛行船ですから舵を取り自分の欲する方向に行き得る故に大丈夫です。氣囊の全長百八十四呎直徑五十二呎之を充たすに二十五萬八千五百立方呎の水素が入ります、是が八十馬力のロールレース・ヂートリツヒ發動機で前進後退を自由にし、それは同じく八十馬力のアントアネット發動機で昇降用に備へてあります。海面上に於ける全昇騰力一萬九千磅で輕氣囊の重量は三千六百磅、發動機及び之に使用するガソリン其他一切の附屬品を合せて四千五百磅に過ぎません。推進器の直徑は十一呎で一時間二十二哩の速力を以て四週間の航空に堪ゆる豫定であります。」

三太郎「此處から北極迄都合よく飛んで行けば何日程で到着しますか。」

エルマン「天候平穩でさへあれば僅かに一週間の行程に過ぎませんから四週間の航空持續力があれば充分であります。其處にある大蛇の様な物は革の圓筒に鋼鐵の鱗を逆立せしめた物で、之を利用して氷原の上に淀泊し、或は氷原の上を曳き滑らして上下の動搖を制限する私の考案であります。」

東洋の孤客親ら北氷洋上の無人島に遊べるの途次、期せずして北極探検家の出發を見送るの光榮を得たるは望外の奇遇と云ふべきである。小艇に乗じてスメーレンブルグを訪問した。此島は第十七世紀の頃和蘭人が捕鯨事業を営んだ遺跡で、一時は千名以上の漁夫が群集したと言はれて居る。今では單に昔物語に過ぎないが、それでも多少の鯨は捕れると見えて附近は肉や油で眼もあてられぬ光景を呈して居る。徳川時代に遙かの極東にある日本に通商を求めた和蘭人は同時に北緯八十度の北極附近にも斯の如く活動して居たのである。第二十世紀の今日でさへ滿洲や樺太を極寒の地と心得て居る日本人は正に將に愧死すべきではあるまいか。

再び解纜して尖峯島を後に北極指して突進した。冰山と言ふ程でもないが右にも左にも流れ來る大小の氷塊は進むに連れて其數を増し、危険益々迫りて到底直進する事が出来ないで、午後三時半頃方向を東に轉じ約三十分の後には再び北に向ひ、次には西に轉じ押し寄せる氷塊の間を縫うて突進したが、午後四時十五分には竟に前進不可能であるとの宣告を受けた。船橋に立つて四方を望見すれば北氷洋は海面全部氷雪に埋もれて居るかの如く、何處を通り抜けて此船が再び歐洲に反れるかさへ疑はしく見える。遙かに北極方面を眺むれば白雪皚々として雪の峰は氷の山に連なり天地の差別さへ知る事が出来ない。天體觀測の結果として現在の地點は。

北緯八十度十四分三十秒

東經 九度二十五分零秒

である事が宣言せられ、音楽隊に連れて同行者各自の國歌を順次に合唱したが、北緯八十度以上の北氷洋上氷雪の間に於て君が代の合奏されたるは空前の事にて、今後と雖も滅多にあるまいと私は信ずる。嘗ては某侯爵の後援で日本の全國民を騒がした南極探検隊でさへ南緯八十度迄に行けずに歸つた筈である。

一月の大寒には熱帶の南洋に避寒し、八月の炎天には萬古氷雪に埋まる北氷洋に暑さを避くる

底の大旅行は容易に出来ないとしても、海水浴や温泉行きをする費用と日数とがあるならば夏は樺太冬は臺灣にでも向はれん事を國民に希望せざるを得ない。

リシイ嬢「此先にもつと進んで行つたら何か面白い物があるでせうね、私行つて見たいわ。」

三太郎「何もありません。雪と氷があるだけさ尤も其外にあなたをとつて食はうとする熊や白狐などが居るかも知れんが。」

五九郎「此先は何處迄行つても氷に埋まつた海があるだけですから同じ事です。」

リシイ嬢「變つた景色の山はありませんでせうか。」

五九郎「山は勿論の事平地もあります。地球物理学上の立場から論ずると南極附近には高い山がある筈で、北極附近全部に涉りて北氷洋が擴がつて居る筈です。」

リシイ嬢「それですとクツクやペーリイが北極に到達して米國旗を建て、來たと言つても、陸がないのではつまらんですね。」

三太郎「それは單に海中に浮んで居る氷の上に米國旗を立てたのであるから、其時は丁度北極に當つて居たとしても今頃は何處かの海に流れて行つたでせうよ。ペーリイが此前に探検に行つた

時には、觀測をして居る間に自分の乗つて居る氷の地盤が流れて自然に北極の近所に行つたと旅行記に書いてありましたよ。」

リシイ嬢「南極には高い山があつて北極は海ばかりと云ふのはどうしてでせうか。」

五九郎「それは自然にさうなるべき理由があります。凡ての物質は互に吸収する故に第三者から妨害されなければ丸い形に集まるのが自然の原則です。丸い物は表面を一定したとすれば内容の最も大なる物でありますから。」

リシイ嬢「何事でも丸く治まると言ひますからね。」

五九郎「然るに地球は自轉して居る爲に遠心力が働いて、其丸い物の中央が膨れ出して楕圓體となります。地球も赤道附近が出張つて居る事は誰でも承知して居る筈です。」

リシイ嬢「ヒマラヤ山脈など云ふ大きな物が赤道附近にありますわ。」

五九郎「地殻が一旦固まつてから更に地球が冷却して内容が收縮すると恰もゴムの空気を冷やした時の如く凹んだ處が出来る。其凹みが海洋となるのであります。其凹みは滅茶苦茶に出来る物ではありません。」

リシイ嬢『ゴムマリの表面がへこむのにも一定の規則がありますかね。』

五九郎「表面は既に固體となつたのでありますから、表面の面積は増減する事が出来ない、その内容に冷却して減少する。其處で表面が一定で内容の最も少い正多面體は何かと言ふにそれは正四面體であります。それですうら冷却するに従つて段々正四面體に似た形に變化して行くのです。大西洋、太平洋、印度洋は南極を頂點として相合する三面に相當し北氷洋が其底面に當ります。北アメリカとアジアとヨーロッパとは此底面を圍む三邊で南米とアフリカと大洋洲とは南極に於て相合する三邊に相當するのであります。』

北緯八十度を越したる當地であるから、四月十六日に出でたる太陽が未だ没せず何回も何回も吾人の頭上を廻轉し、八月末日迄は没する事がないのであるから、いくら長い話を續けても日が暮れる恐れはない。従つて北極附近とは言ひ乍ら豫想せる程の寒さではなく、殊に乘客互に隔意なく話し合つて居るのであるから、身心共嬉けさうな暖かさを感ずる。

五九 東西南北

四方と言ふ様な事は小學の兒童でも既に知つて居る筈であるが、一口に言へば匹夫匹婦の愚と雖も與に知つて居る事柄で、而も其究理的の奥義に至れば聖人と雖も猶知らざる處のあるのは自然界の通則でありまして、四方の意味なども亦一見明かなる如くにして其實は容易に決定されない問題であります。食膳に就いた際に箸を持つ方が右の手で、茶碗を持つ方が左の手であると云ふ様な説明に依つて、吾々は子供の頃から家庭に在りても或は學校に於ても教育されて來たのであります。

日の出る方が東であると教へられて満足して居た田舎の子供でも、少しく長じて野外勞働に従事し、日出前に家を出で星を戴いて家に歸る環境に立てば、四時の季節に従つて日の出沒する方に大差あるを認めます。其處で今度は東西と言ふ方は季節に依つて移動すべき物であるか、或は冬日の出る方向から夏日の出る方向迄を含む廣い範圍を凡て東と言ふのであらうかと云ふ様な疑問が湧いて來る様になります。現に私は私の同僚である某教授から、東北の方が鬼門であると言ふが其鬼門と云ふ方向は一點に限られてあるか、それとも可成り廣い範圍を指す物であるかと云ふ質問を受けた事があります。東や北が一定不變であるならば東北も又一一定不變である可き筈

ですけれども、若し東が前に言つた様に或範圍に涉つて居るならば、鬼門も亦さうであるといふ結論になります。

平かなる校庭の中央に立ちて自己の影法師に注目して視ると、其影の長さは一日中の時刻に従つて長短の差ある事は衆知の事實であります。摩登迦經卷の中に二月一日日初めて出るの時に、人影の長さ九十六尋あり、第二影は長さ六十尋あり、第三影は長さ十二尋あり、第四影は長さ六尋あり、第五影は長さ五尋あり、第六影は長さ四尋あり、第七影は長さ三尋あり、第八影は日の正中にて影は其人と等しく、第九影は長さ三尋あり云々と説明してあります通り影の長さは朝より次第に減じて日中に最短となり、午後は再び其長さを増す物であります。

影が最も短かく成りたる時刻に直立せる物の没せる影の方向に直線を引けば是は其地點に於ける子午線を示す物であります。而して此子午線に直角な直線が卯酉線であります。換言すれば日中に太陽に面して立てば前は南で後は北である、右手は西を左手は東を指します。斯の如く四方を定むるのに南北を先にする事は理論上から言つても、或は實驗觀察を基礎として教育すると云ふ立場から見ても、乃至は實際上の便利からしても舊來の方法に優つて居ります。日出或は日

没の實景を兒童に觀察せしむる事は、現今の小學校に於ては事實上不可能であるのみならず、家庭に於ても都會生活者は父兄自身が恐らく何處から太陽が出づる乎を知らずして、傳統的に太陽の出る方が東であると説明して居るに過ぎないのでありますまいか。地方や季節に依り見掛の日中と標準的の正午とは時刻に於て多少の差異あるとしても、夏と冬とで日出の方角が違ふ程大きくはありません。従つて旭日の出る方が東であると言ふよりも晝食の頃に太陽のある方が南であるといふのが正當にして且實驗し易いのであります。

一日中では最短である日中に於ける影の長さは一定不變の物でなく、昨日と今日とでは等しくありません。仙臺市に於て長さ十尺の棒を垂直に立て、觀測しますると、二月三日の立春に影の長さ十四尺あり、紀元節には十三尺一寸となり、三月彼岸の入り日には八尺三寸弱にて六月中旬入梅の節には二尺七寸に減じ、六月下旬に最極少に達し二尺六寸餘となります。影の短いと言ふ事は太陽が高く天頂に近いと言ふ事でありまして一年中で影が一番短い日を夏至と言ひます。夏至が過ぐれば影は再び次第に長くなり夏の土曜には三尺一寸餘に延び五尺七八寸に達すれば暴風の季節來り秋季皇靈祭には七尺九寸にて年末頃一番長く此日には太陽が東から出て西へ没して十

八尺六寸弱となり此日を冬至と言ひます。直立せる棒の上端と其影の先端とを結ぶ直線が地面と成す角を測定して見ますると仙臺にありては夏至の日に七十五度十二分冬至の日に二十八度十八分内外であります。従つて冬至と夏至とに於ける太陽の高度の差は前記二角の差四十六度五十四分に等しく此角を二等分する直線は赤道に向ひ春分及び秋分の日に太陽は此方向にて南中する筈であります。而して日至に於ける太陽の位置と赤道との間の角二十三度二十七分は黄道と赤道とが成す角でありますから、謂ふ處の地球公轉の軌道面に對する地球自轉の軸の傾きであり、地球自轉の軸は赤道面に直角でありますから七十五度十二分と二十三度二十七分との差を九十度より減じたる残り三十八度十五分は觀測地仙臺の緯度である事が明かであります。

序に申しますが古來東洋に於ける春夏秋冬は春分、夏至、秋分、冬至を以て各其中央として有りますけれど、西洋の四季は之と一致せずして、例へばスプリング春分に始まりて夏至に終り、夏至より秋分迄がサンマーであります。従つてサンマーを夏と譯するのはビールやワインを酒と意譯する様な物で必ずしも全然一致して居るものではありません。

以上の説明は何等の制限なしに正當であるかと言へば、決してさうではありません。我日本の本

土の如く斯る説明が採用せられる地點を吾人は北半球の温帶地方と呼んで居ります。觀測點が南に移るに従つて甲角も乙角も共に増加するが兩角の差は一定不變であります。而して甲角が九十度となる地點は温帶の南の限界であり、乙角が零となる地點は温帶の北の限界であります。甲角が九十度となれる地點を越えて更に南に進めば、此日に太陽は天の北方に見える事になります。斯る地方を熱帶地方と言ひます。而して甲角が九十度を越ゆる事二十三度二十七分に達すれば丙角が直角となる筈です。換言すれば其他にては春分秋分の日中に太陽が天頂に見えます。此日には太陽が赤道にあるのである故に此處が即ち赤道直下であると言ふ事に成ります。

乙角が零となりたる地點より更に北に行けば少くとも冬至の日には太陽が日中にも見えない。従つて日出も日没もないと言ふ事になります。斯る地方を寒帶と云ふのであり日の出沒のないのは單に冬至の日のみに限らず、其期間は北に進むに従つて長く竟には半箇年間日の出沒なき地點に達する。其處が即ち北極で北極星が天頂に見え、衆星は何れも之を中心として天球上に水平なる圓運動を成す事になります。

以上は北半球につき説明したのでありますが南半球に於ても同様であります。赤道直下を對

照の中心として南と北とが取り換はるだけであります。

三四歳の子供と向ひ合つて食卓に就きて食事を済ました後に子供の顔に飯粒が附いて居るのを見附けた親がそれを言ひ聞かした場合を假想して見る、子供が何處に飯粒が附いて居る乎と反問した時、其親が自分の右の頬の中央を撫でて見てありはしない。嘘を言ふなと怒つたならばどうですか、此處で一考する必要があるまい乎、教へる親が誤りであるか、怒る子供が悪いのか、親の左の頬は子供の右の頬と相向つて居るのであります。其處で親が南面して居るならば子は北面して居る故に、親の示した位置が親の顔の真中よりも少し東の方に當るならば、子の顔の真中よりも少し東の方に當る點を探せば、それは子供の顔の右の頬である事は必然の理であります。従つて教ふる人が顔の中央より少し左の處と言ふ意味で此邊と言つたのならば反對に顔の中央より少し右の處を探した子供が悪いので教ふる人に罪はないけれども若し顔の中央よりも少し西に飯粒があるのに東の方を指示したから子供が其通りに東の方を探したのであると見れば子供が怒るのも當然であると言ふ事になります。事實に於て若し夫れが飯粒でなくて玩具である場合を再考して見よう、子供の探がして居る玩具が子供の左方即ち其西の方にある場合に、親は自分の左手即ち東

の方を指してそつちにあると教へますまい、此場合には親が自分の左手の方を指示したならば子供は其右手の方を探さなければ見當らないのであります。

是に依つて明かである如く前後左右や東西南北と言ふのは話す人の肉體を基準に探りて言ふのであります故に、決して絶対的の物でない事が明かであります。然るに同じく相對的と言つても更に之を精査して見ると、前後左右と東西南北との間には見逃す可からざる相違があります。

東西南北について考へて見ますと前後左右の場合とは多少の相違があります。即ち先に言ひました如く、親から見て東に當る方角は子供から見ても東に當り、個人には關係がない故に一見した處では絶対的の様に思はれる。従つて吾人の祖先は日本が世界の東の果てに在る如く考へて、之を日東國とか或は極東などと稱して居るのであるが、實際の處では日本から東に行けばアメリカ大陸がありアメリカから更に東に行けば歐洲があります。其處で歐洲は日本の遙か東に當るかと言へば誰でも是に反對して歐洲は西にあると云ひ、特に西洋と云ふ別名さへ附けて居るのであります。是に依つて之を見ますと東と乎西と乎云ふ事も必竟は相對的の物であつて、絶対的に東の果てとか西の果てなど云ふ地點は我地球上には無いのであります。

四方即ち東西南北の四方角は互に對等の物である如く一般に考へられて居りますが、同じく方角と言つても東西と南北との間に非常な相違がある事は、南極と北極と言ふ地點が我が地球上に現存するので明かであります。東や西に果てがなれないのに何故に南や北には果てがありますか、地球が球形である故に、日本から東へ東へ行けば竟には地球を一週して再び日本へ歸る事になるならば、同様に日本から南へ南へ行つても竟には地球を一週して再び日本に歸り得る筈ではありませんまいか、然るにそれは事實上出来ないのであります。而してそれは單に寒さの爲に通行が出来ない故ではありません。日本から南へ南へと進めば竟には南極に到達するが、一度南極に到達して其處に立つて居る人間から見れば前後左右何れを向いても北と平南と平云ふ方角がなくなりません。従つて一度南極に立てる人が日本に歸るつもりで一步踏み出した後に南に向へば再び元の南極に戻る事になります。是に反して始に日本から北へ北へと向つて進み、一度北極に到達した人間は地球上の何處に行くにも南に向つて進むより外に道はなくなりませんから、東や西へ進んだ場合とは全然相違して居ります。

斯くの如く東西と南北との間に根本的の相違あるは何故であるかと云ふに、それは吾人人類が生存する世界は幾何學者の考ふる如き虚無の空間ではなくして、地球と云ふ物質に依存して入り、其地球が名の如く球狀で且一定の軸を以て自轉して居るに基因するのであります。我々が太陽を土臺にして決定した南北と云ふ物は地球の表面から云へば此自轉の軸と密接の關係を有する方角であり、此軸が地球の表面と交る點が即ち南極及び北極であります。萬一地球が自轉して居るに單に靜止せる球狀體であるならば斯くの如き差別は起りません。

通俗に南北を決定するには磁石に依ります。磁針を吊せば常に一定の方角を指すもので、大體に於て太陽に依つて決定した南北の方向と磁針の方向とは一致します。今此磁針の示す處に従へば例へば横濱から東へ東へと進めば竟には地球を一周して再び日本に歸つて來るのであります。若し磁石の示す方向に従つて北へ北へと進んで、北極に到達する事も或は再び日本に歸る様な事も決してありません。北米の北方なるブーシヤ半島の或地點に到りますと、北を指すべき磁石の一端は垂直に地下を指す事になります、更に詳細に之を説明しますると次の通りであります。

鋼鐵の細長き針を其中央にて吊し之が自然に水平になる如く其重量を加減した後此針を大磁石の附近に持つて行けば、是が直に感應磁氣を得て一個の磁針となります。然るに斯くの如く磁針

となりたる後に元の如く吊して見ると再び水平には成らずして仙臺ならば北端が五十度以上も下に向きます、之を伏角と呼びますが此伏角は北に進むに従つて増加するもので、東經二百六十四度二十一分北緯七十三度三十五分、プーシヤ半島の或地點に到れば此角が丁度九十度となり磁針は上下の方向を指す事と成る。故に地平面上に於ては南北と云ふ方角がなくなり、上が南で上が北即ち上下と磁針の示す南北とは一致してしまふのであります。即ち地球上に於ては一般に上下並に東西南北と云ふ方角を區別するのが普通でありますけれども、磁石を標準として上記せる如き特別の地點に行けば上下と南北との區別がなくなり、従つて東西と云ふ方角は不定に成り此點に立つ人には前後左右何れも之を東とでも西とでも勝手に呼ぶ事が出来た。

磁針の示す南北線は精確に云へば、太陽を基準とせる子午線と一致する物ではありません。而も其差は場所によつて或は右に偏し若くは左に偏するのみではなく、此偏角は同一場所に在りても年と共に増減し其變化は豫想外に大なる物であり、例へば巴里市にて觀測せる結果に依りますと西曆千五百四十一年に東七度半なりし物が千八百十四年には西二十二度半となり二百七十年間に約三十度も變化して居ります。換言すれば若し十六世紀の中頃に磁針の示す處に従つて南向きに

建てた家があれば、十九世紀の初には殆んど南に近い方角に向いて居ると云ふ事になります。

磁針に依つて決定される南北とは何乎と云へば、地球の磁氣に基き磁場に於ける磁力線の方向に過ぎない。従つて磁氣なく磁場に依る幾何學的空間に在りては南北も東西も無意味である。但地球や太陽などの如き自轉體附近に於ては其自轉の軸を標準として南北を決定し得る事勿論であります。

六〇 米人氣質

佛國里昂市見物の際に第一の名所と稱せらるゝフルビエールの高臺に上り有名なるノートルダムに參拜した結果として聖母とキリストに關し疑問を生じ是を解決せんが爲に更に英國に渡り、次に歐洲大陸に於ける寺院や博物館などを訪問し其起源を知るべき材料をたづね、茲に再び里昂市に戻つて來ましたのは三月の末であります。時恰かもパーク即ちキリストの復活を記念する期節に相當して居るので大學や研究所などは凡て休業であるから市の内外を散歩したり方々の教會堂を巡禮して二三日を過した。市内を散歩して最も眼に着いたのは此祭日に贈物として一

に採用せられて居る物品が至る所の店頭に陳列されて居る内で鶏卵に似せたる物の甚だ多い事である。チヨコレート製の鶏卵、それも大きいものになると徑三十センチもあるのがある。兎が鶏卵を背に載せて居るのもあれば、鬼が島征伐の猿の様に車に積んで引いて居るものもある。

五九郎「鶏卵にしても、チヨコレートにしても、最も元氣を附ける食料でありませんか。こんな物を而も春の三月陽氣の最も盛になる時期に贈物とするなどは宗教上の儀式として怪しからんでありませんか。」

三太郎「耶蘇教は凡てが積極的であると自慢して居るから、大に元氣を養つて之から活動しようといふお祭りかも知れんさ。基督の復活を記念する祭日であると云ふから何れ十字架上で死んだ人間を復活させるのだもの鶏卵の様なものでも食べさせて先づ元氣を回復させるのが第一でありませんか。」

五九郎「其祭日と云ふのは一體何日なんです乎。」

三太郎「春分以後の満月の次の日曜日なんださうだ何月何日と云へば簡単なんだけれど昔の人は變な規則を作つたものだね。」

五九郎「どうしてそんな教へ方をする乎と云ふに、それは昔の人の生活が月や太陽などの天體に支配された結果さ。太陽暦で何月何日と定めても其日が、暗夜であつたなら燈火の設備のない古代人には集會が出来ないでせう。それに又、日曜日でなければ民衆が凡て一堂に會するの都合が悪いからね。」

三太郎「日曜日でなくとも其祭日日を休日とすれば差支ありませんまいが、實際に基督の復活したのが偶然に日曜日であつたの乎も知れんさ。」

五九郎「さうするとつまり昔の人は何月何日と云ふ日附には重きを置かずに何曜日と云ふ事に重きを置いたと云ふ事ですね。尤も昔は曆法が不完全で春分の日が三月にあつたり、五月に来たりしたから何月何日と定めては氣候との關係が面白くないので春分の日を土臺にしたのかも知れんね、さうすれば毎年同じ氣候の時に此祭を行ふ事になるから。」

こんな話をしながら大通りを歩いて居ると一つの活動寫眞館の前に出たが、恰もマチネが始まる時刻であるから入場した。映畫は「米人の婿入」とでも云ふ様なものであつた。其筋書の大略は斯うである。佛國の或舊家に一人娘が居たのがそろく年頃にも成つたので御婿さんを探が

したけれど容易に見つかからない。佛國では昔から二兒制を嚴守し萬一に三人目の子供が生まれようものなら其婦人は世間から笑はれ親類や友人は悔みの言葉を寄せると云ふ位になつてゐる。それに又婦人自身の立場から見れば一度子供を生む度に容色は衰へて女としての資格か、それだけ下り社交界の落伍者と成る恐れがある。假令それは我慢するとしても懐妊して居る期間の苦惱は大抵ではない。十ヶ月間繼續する處の大事業である依つて出来るだけ避妊法を講じ、それに必要な器具機械類は至る所に販賣せられて居る。首府巴里に於て是に關する専門の大商店が堂々と店を張つて居るのには實に驚かされた。理想が二兒であるから一兒以上を産む者は殆んどないが一兒のみ或は一兒をも持たざる夫婦が澤山ある。故に今度の大戰争で壯年の男子が大概戦死し或は廢兵となつて居る今日の佛國は全く男ヒステリに逢つた有様である。其所で思ひ附いたのは遠い親類で米國に移住し今は大成功をして居る者がある。其子供を一人貰ふ事に相談がまとまり、愈廣道吉日を選び米國から三國一の御婚様が到來すると云ふので、準備萬端を整へて待ち居ると驚くではないか、一見惡漢らしき壯丁が勞働服に泥靴の儘で南京袋を肩にかついで玄關から應接室へ敷物に泥だらけの足跡を印しながら室の真中に坐り込んだ。家族の者が呆然自失して居る間に

に肩に掛けた南京袋を床上になげ出し、是を逆さにすると山吹色の金貨が室内に散亂した。此壯丁が惡漢ではなく、即ち米國から迎へられた御婚さんなのであるから今更拒絕する譯にも行かず兎に角食堂に案内すると早速卓上に飾り立てられた梨子や林檎を驚つかみにして喰べ始め斯んな物は邪魔であると椅子も卓子も投げ飛ばして室の真中に尻をつき兩脚をなげ出し葡萄酒の喇叭飲を始め暴虐無人の亂暴なる振舞に家族の者は唯々あきれはてて口もきけずに立つて居る。

三太郎「是は奇抜な活動寫真だね。米國人の不法法と其成金ぶりを遺憾なく表はして居るではありませんか。食事の際は眞先に水菓子を喰べるのが米國流だから面白よ。佛國人から見たら現今の米國人は金こそ持つて居るが全くの無教育で到底紳士として取扱はれるだけの資格がないと見えるだらうさ。」

五九郎「米國人だつて凡てがあんな禮儀作法も知らない野人ばかりではあるまいがね。あれはつまり今度の戦争で佛國が救助を必要としたのに付入つて米國が國際上の禮儀も道德も打捨て唯々黄金の勢力を振り廻すのを憤慨してあんな活動寫真をやつてるのさ。あの婚は米國人ではなく米國自身を表象して居るのですよ。」

三太郎「今度の戦争では佛國が非常な國難に陥つたのを米國が出兵して助けたのであるから佛國民は上下を擧げて米國を徳として居る筈と豫想して来て見たら全く反對ですね。何所に行つても米國や米國人の悪口ばかりして居るのは案外だよ。」

五九郎「止むを得んさ。個人だつて同じ事でせう。俄か分限者が金を貸し附けてそれを恩に着せて威張りちらしたなら、世間から悪まれるのは當然でありませんか。財産があるからと云つて犬や猿の如き人格の者が群衆の風上に坐り込んだら社會は暗黒になるより外ないからね。實際の所、今度の戦争で渡歐した米國の兵卒と云ふのは何れも歐洲に生れた無教育な人間の屑兒見たいな徒輩が米國に移住し、加之米國に行つても満足に職を得る事の出来ない浪人共が急に兵役を志願したものばかりですからね。さう云ふ人物が米國人と云ふのを鼻に掛け金を振りまいて仕たい放題の我儘をするのであるから、心ある佛國人から見たならば泥靴で客間や食堂を踏み荒らされる如き感じをするでせうよ。」

それにしても斯んな米國の悪口を公然とやつて能く米國から抗議が出ないものだと思ひを抱いて見て居たらさすがに抜け道が出来て居る。即ち今來た亂暴者は眞の米國人では無く以前から其娘に懸想して居た男が、米國人との結婚を妨害せんが爲に附近に流浪して居る惡漢を買収して仕組んだ狂言であつた。暫くすると米國から三國一の嬌殿が自動車を買關に横着けにしたので、僞婚は逃げ出し此處に目出度三々九度の盃を擧げると云ふのである。

六一 四月 馬鹿

活動寫眞館に長く居たので氣分が悪くなつたから少し川風に當るつもりでローン河の岸にある竝樹の下のロハ臺に腰を下した河を隔てて雄大なる建物が眼に着く、それは云ふまでもなくリオン大學である、先日訪問した折にはパーク休暇で誰も居らぬと云はれたのを思ひ出し今日は四月馬鹿と云つてどんなうそを云つても差支のない日であることに氣が附いた。

三太郎「一體キリスト教には我々から見ると不可解な風俗習慣が澤山あるですね、パークの祭日に鶏卵やチョコレートチョコレートの如き元氣を養成する食物や興奮劑を贈物とするのも變であるが更に或日には如何なる嘘を云つても差支ないなどは宗教上許されて居る風習としては理解出来ないではありませんか。」

五九郎「必ずしもさうではないさ、西洋のアプルと云ふ月は恰度太陽が黄道上に於て黄徑十度乃至四十度の邊に居る季節を指すので東洋で云へば孟春の月であります。此月は最も春氣の猛烈なる時期でありますから葉も木も花盛り男も女も夢中になつて性的快樂を追ふ風俗が太古から有つた筈です、其風俗をキリスト教に化してからも受け継ぎました爲に其頃催される祭日には元氣衰弱を防ぐ必要上鷄卵を贈物とする如き怪けなる習慣が昔のまゝ残つたと見れば良いではありません乎。」

三太郎「卵を贈物とする理由はそれで説明出來た所で何も嘘を云つて差支ないと云ふ理由にはありませんまい。」

五九郎「それは理由になるよ、孟春の月に於て男女が相逢うたからと云つて直に情意投合する乎否哉は不明であります乎、従つて直接行動に出る前は先づ以て其内意を慥めなければならんでせう。」

三太郎「内意を慥めるに何も嘘を云ふ必要はありませんまい。」

五九郎「嘘を云ふ必要は無論ないさ、けれどもあれは嘘ですと云ふ必要も場合に依つてはありますまい。」

す、何の相談でもそれが成立する爲には先づ相手方の一方から他方に對して申込まねばならんではありません乎、其申込が直に承諾されるなら至極簡單であるが萬一それを拒絶された場合にどうです乎、女なら猶の事であるが男にしても非常な赤恥をかく事に成りませう。」

三太郎「成るほど、其時には今のは嘘ですと逃けるのです乎。」

五九郎「假令相談がまとまりかけた所でそんな相談をして居る事が他人に知れたら西洋の風習として場合に依つては決闘でもしなければ成らん事になりませうそんな場合に最も簡單に而して最も都合好くそれを解決する方法は現今實行されて居る。アプリル・フールであります、此日には如何なる嘘を云つても宜しい、どんな重大なる事件でもそれを冗談と認めると云ふ習慣があれば安心してモーシオンを仕掛ける事が出來ます。若し失敗した時には今のは冗談ですよと云ふ一言で解決されるのですから……」

三太郎「それは面白い説明ですね、實際斯う云ふ事は眞面目になつて申込むのが頗る工合の悪いもので御座いますから殊に男女の關係の如きは冗談として嘘として云ひ出すのが唯一最良の方法である乎も知れませんが、日本にも嘘から出た眞と云ふ諺かある位であるからアプリル・フール

をやつて居る間に眞實物になる場合も澤山あるでせう。」

五九郎「早い話が今日吾々が斯んな話をして居るのを日本の道學先生が聞いて不都合であると怒つた場合を考へても同じ事です。」

三太郎「其場合には今日アブリル・フルだから今の話は冗談ですと逃るつもりかね、君の説明にして正當であるならば斯んな西洋の風俗は日本内に入れぬ事にすべきものですね。」

五九郎「必ずしも左様ではありませんよ、實際問題として嘘を云ふ事を許すと云ふことは人に思ふまゝを云はせる一番良い方法であると私は思ひます。裁判所などで證人を取り調べる場合などでも寧ろ嘘を許すことが却て成功するでないかと私は思ひます、決して一言も嘘は申しませんと宣誓などさせるからして取り調べられる方では萬一にも間違つて嘘を云つた事になりはせんかと心配から一言も口が開けなくなるので止むを得ず知りません存じません覺がありませんと答ふる外は無くなる筈です、誰であつても眞實の事を正確に記憶して居ることなどは事實上出来ませんからね。」

三太郎「嘘を云ふことを許して仕舞つてはいくら詰問した所で平氣で嘘八百をならべるから何にもなりません。」

五九郎「さうではありません、假に嘘八百を並べた所で残り二百は眞實でありません乎、正味二割の取り所があつたら澤山です、例へばいくらアルコールが好きの人でも純然たる酒精では飲む氣になれないが十パーセント乎十五パーセントのアルコールを含んだ麥酒や日本酒でこそ誰でも好んで飲む様になると云ふものです。」

三太郎「それでは今やつて居る君の議論も矢張り嘘八百を並べて居ると見るべき乎ね。」

五九郎「どれだけが冗談でどれだけが眞面目な話であるかを區別するだけの能力が聞く人に必要さ、尠くとも私の云ふ事には假令嘘八百が混つて居るにしても二百の眞理が其内に含まれて居ると斷言する事が出来ますぞ。」

三太郎「さう云へば孟春の月に公然嘘を云ふ事を許す習慣にも面白い意味がある事になるね。」
五九郎「其處でね君、嘘から出た眞と云ふ諺に従ひ四月馬鹿が本物に成つて冗談から子が出来る場合もある筈でせう、それが即ち復活と云ふ現象なんです、春分の次の満月の次の日曜日に復活したとすれば十二月下旬に誕生するのが當然の順序でありません乎。」

三太郎君の説明が正當であるとすればつまり西洋に於ける復活祭と云ふのは東洋に於ける延命地藏尊が其職責を盡すための御祭りなんですな。」

五九郎「勿論さうです、それであるからこそ、復活祭には男女共に鶏卵持參で徹夜會合を續けて行くのさ、個人が一方に於て死んでも更にそれが他方に於て生れるならば人類としては復活した事になり人類の生命は是に依て無限に延長される道理でありません乎。」

斯んな議論をして居る間に新鮮なる空氣にさらされ頭が恢復したからロハ臺を離れ河岸に沿うで竝樹の下を歩いて行くと道を隔てた教會堂の壁にもたれて倒れかかつた様な人影が見える、或は行路病者では有るまい乎と思つて近寄つて見た所が六十歳以上かと思はれる女乞食が壁を後に坐つたまま居眠りして居るのであつた。是が日本であつたならば神社や佛寺の縁の下にもぐり込むとか都合が宜ければ廂の下を無斷拜借して寢て居れば兎も角一夜の雨露をしのぐ事は出来るのであるが西洋の建築では左様な便宜は得られない、煉瓦建の堂々たる建物の中にマリアやキリストが雨も風も知らずに安閑として居るけれど壁一重の外に居る女乞食に貸し與ふべき廂も無ければ縁側も持ち合せて居らぬ、東洋流と西洋食との相異は此一事にも明かに示されて出る、叩けよ然

らば開かれんとキリストは教へたさうだが此場合にいくら女乞食が叩いた所で彼の頑丈なる鐵の扉が開かれさうにも思はれない。それよりは叩たかずして無斷拜借する事の出来る廂や縁側を持つて居る神や佛の方がキリストよりは慈悲心に富んで居るではあるまいかなどと話をしながらホテルに歸つた。(完)

大正十三年十月二十日印刷
大正十三年十月三十日發行

定價金貳圓八拾錢

(信仰物理異國行脚與付)

不許複製



著者

日下部 四郎太

發行者

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
野間 清治

印刷者

東京市小石川區諏訪町五十六番地
堀江 關武

印刷所

東京市小石川區諏訪町五十六番地
常磐印刷所

發行所

東京市本郷區駒込坂下四八

大日本雄辯會

電話小石川三五・三六・三七・七八
振替口座東京三九三〇

理學博士 日下部四郎太先生著

四六判天金函入珍寫眞四十三
定價參圓五拾錢 (送料十二錢)

三十八版

信仰
佛利

一人行脚

肩の疑らない文調で、然も徹底した科學の知識を土臺にして東西に涉つて未開時代の信仰や生殖機崇拜や現代の變態性慾等の秘密を學理的に解剖して、皮肉警拔な筆で叙した所、實に面白く全く前代未開の珍書、稀代の快著である。

目次一般

- 鹿島立
- 要石
- 陰陽道
- 繪の化物
- 閻魔様
- 筑波登山
- 地震計
- 口寄之術
- 生殖機崇拜
- トツヘンビ
- 浮島の祈禱
- 稻荷神社
- 狐と茶椀
- 五行七曜
- 三山參詣
- 大物忌神社
- 鳥海登山
- 百物語
- 恐山參詣
- 盆踊
- 地獄巡り
- 極樂嶺
- 劉田岳之噴火
- 大黒様
- 養之河原
- 高干穂峯
- 仙境異聞
- 櫻島
- 阿蘇岳
- 羅漢寺
- 寫真問答
- 御用船
- 朝鮮奇談
- 奉天見物
- 鐘馗大臣
- 釧路行
- 神輿荒れ
- 濃霧
- 包金

大好評
九版!!

本書は實に鵬程一萬五千餘哩、かのアフリカ探検記にも比すべき大旅行記なり。天下の寶庫、世界の樂園を詳述して餘すところなし。

法學士 鶴見祐輔 先生著 菊判總クローズ 定價六圓 寫眞版八十葉入 送料十八錢

世に南洋と云ひ、南洋と呼ぶ者多くして而も其の眞を語る者何ぞ少きや。著者曩に歐米を遍歴し又茲に南洋各地を巡遊す南洋遊記一篇は實に著者の眞摯なる遠觀と、鬱勃たる意氣と典雅なる感情とを披瀝せるものなり。就中比島内二千哩の旅行と云ひ、アンコール聖蹟の巡禮と云ひ邦人未踏の地に入したるは著者の大いに誇りとする所、流暢平明なる行文は巻中挿入の美術寫眞版と相俟つて南洋の風物紙上に躍如たるを見るべく、材料の豊富にして正確なるは獨り本書に於てのみ窺ふべく、文學書たり、旅行案内書たりと同時に、又企業家の好便覽たるを失はず。好く座して誦すべく携へて實地を探るべし。敢て江湖に薦むる所以なり。

賜天覽台覽

南洋遊記

澤田撫松著 (版九)

我國婦人
界の爲に
万丈の氣を吐ける
大奮闘史

大正新立志傳 正婦人立志傳

四六判美裝各名家寫真挿入
定價金一圓八十錢
送料金十錢

本書目次

- (上村松園女史) 臥薪嘗膽開秀畫壇の大家となる迄
- (鳩山春子女史) 燈心の火影で夜更け迄勉強して
- (橋橋絢子女史) 盲人の夫を助け向上の一路に
- (矢島揖子女史) 月給四圓の苦境を脱して……
- (山田わか子女史) 小學校も卒へず渡米勉強……
- (三輪田眞佐子女史) 赤食洗ふが如き家に生れて
- (跡見花蹊女史) 弟妹の守をしながら書畫を習……
- (吉岡彌生女史) 嘲笑する共學の男子を睥睨して……
- (嘉悦孝子女史) 製絲工女から發憤して……
- (櫻井ちか子女史) 東西も分る異國に苦學して……
- (山脇房子女史) 眼の廻るやうな家事を手傳ひ
- (大妻コタカ女史) 往復五里の學校(毎日通學して
- (戸板關子女史) 針一本の働で酒好の父を養ふ
- (三宅花圃女史) 貧苦生の夫を博士にする迄の内助
- (小寺菊女史) 五人の弟妹等を抱へつゝ、大に
- (奥宮加壽子女史) 女中なし乍ら女子大學卒業

▼本書は現代十七名婦人が逆境を突破し艱難誘惑に打克つて輝く榮冠を得るに至つた血涙の記録である。

立身出世の活模範

新人物立志傳

大日本雄辯會編

四六判美裝各名家寫真挿入
定價金一圓五十錢
送料六錢

好評
十版

刻苦精勵遂に勝利の榮冠を得るに至つた新人の大發憤録。

忽卅
六版

名聲赫々たる現代名士の血と涙とを以て描ける大奮闘史。

三宅博士
序文

爲藤五郎先生著

四六判各名家寫真挿入
定價金一圓六十錢
送料六錢

大正新立志傳

— 内容の一斑 —

- ▼新聞配達より出世して政界の大立物横田千之助
- ▼水呑百姓の家に生れて世界的大醫學者野口英世
- ▼日給八錢の職工から起つて救世軍大佐山室軍平
- ▼昔は巻煙草職工、今は鐘紡事務武藤山治
- ▼玄關番から出世して洋畫界の泰斗石川寅治
- 目次の一部 —
- ▼木版職工から畫界の寵兒となる迄
- ▼子守をし乍ら大學を卒業した俊才
- ▼牛乳配達から海外植民學校長となる迄
- ▼親に勤當され電車賃にも窮した身が
- ▼玄關番から新劇の開拓者となる迄

安藝愛山先生著

通俗教育道話

四六判總一冊 定價二圓十五錢 好評九版

極卑近な例をとり、面白可笑しく修身齊家處世の道を説いたものである。所謂道學者流の堅苦しい理窟は全く抜きにして、ここ迄も新思想をとり入れた自由と明るさがあり、終始一貫して愉快なお伽喃を讀むやうな親しみがある。家庭や學校に於ては勿論、老いも若きも、男も女も誰が讀んでも有益であり、通俗教育に於ける最良書として已に定評がある。

面白くて 萬人向きのお話

一 部 一 の 容 内 一

- ▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽
- 瀧腸薬を呑む 蠅のシツボ 人間その生捕り
- 泥巡査 三鹿に呑ます 馬鹿のへま 不精む 哀れぬ 死屍の太夫
- 氣死ぬれ 放屁の太夫 人夫統者の幸也
- 播く者刈る者 鬼砲を磨いた針 鐵砲の下代價
- 見栄坊の代價 山姥長者と 百萬長者 蛙の祈り
- 河豚の汁 大名と風呂 肥にも罪人の首
- 播く者刈る者 鬼砲を磨いた針 鐵砲の下代價
- 見栄坊の代價 山姥長者と 百萬長者 蛙の祈り
- 河豚の汁 大名と風呂 肥にも罪人の首
- 盗九平の歌 蓬菜の宮カ 蓮の歌
- 豆腐に火の如し 假面舞臺の裏面 見切を借る方
- 有難迷惑 月謝借る方 貸小借る方 寝平の借る方
- 見切を借る方 有難迷惑 月謝借る方 貸小借る方
- 寝平の借る方 貸小借る方 寝平の借る方

分冊第一話 定價二圓十五錢 送料十四錢

理學博士

丘淺次郎先生著

上製菊判綿布函入定價四圓五拾錢(送料十六錢) 並製菊判新式美本定價貳圓八拾錢(送料十四錢)

煩悶と自由

本邦學界の誇 (忽九十版)

世界的著名

本書は生物學界の泰斗たる丘博士が獨創的研究の發表である。その警拔なる生物學的的人生觀乃至社會觀は諷諭縱橫、筆鋒辛辣、直ちに時弊の中核を抉り、生物界に流るゝ一大原理に基く人類退化説を基調として文化問題人生問題に言及せる所、實に全人類將來の權威ある豫言にして同時に嚴肅なる批判である。社會問題、思想問題を論ぜんとする者の必讀すべき世界的大著述たるのみならず、全篇悉く行きつまるる文明の行路に一大光明を與ふる不朽の名著といふべく、苟くも一丁字ある者の必讀すべき金玉の文字である。

目次

- 自然の復讐
- 自由平等の由來
- 新人と舊人
- 題字、序文、校閱
- 戦に於ける人類の競争
- 劣れる民族の損と得
- 煩悶の時代
- 境界なき差別
- 固形の論理
- 何所に矛盾ありや
- 一種の人生觀
- 一代後を標準とせよ
- 先づチヨン盤を切れ
- 他力教育の危機
- 疑ひの教育
- 理科教育の根柢
- 實用を重んずるの弊
- 運動復古論
- 述懐
- 現代文明の批評

大膽深刻を極め戀の告白

岡本一平畫伯 漫畫自叙傳 へぼ胡瓜

警拔なる中に禪味を加へた此
妙文に接する者何人も文章と
着想の巧妙に驚嘆せずには居
られまい。或る批評家は漱石
以後初めての漱石だとまで激
賞された。實際之を味讀すれ
ば著者の漫畫に見る様な人生
に對する深い省察が現はれる
我國の藝術壇に獨特の一新境
を開拓せる空前の快著！切に
清讀を俟つ……

忽ち四十一版

四六判箱入美本
定價五十葉挿入
郵送料金八二圓
錢

「わが戀は荒砥にかけし剃刀の、あひもせな
けれりや切れもせぬ、蛇ぢやないぞえ」
生殺し「まア面白いのね」
「面白いですか？單に面白
い丈ですか？ちやア何と
申したら宜しいの」お辛
いでせうと同情して下ま
らな、ては「一體それは
何のことやら、私には
……かよ子さん、蛇ぢや
ないぞえ生殺し、あなた
は何時迄、私を生かしも
せず殺しもせず中途半端
な境に置いて平氣で居ら
れるのです……」(本書内容の一節)



岡本一平先生作並畫

どぜう地獄

輕妙洒脫、後の漱石と稱さるる名
文と古今獨歩の觀ある漫畫。兩々
相合せて天下無二の素晴らしい一大
漫畫小説

大好評忽九版

世間離れのした氏の自叙傳であつて、彼女
との戀から結婚まで、漫畫家連中の底抜け
遊興振りなど、悉く眼に涙して笑はしむ
る底の哀調の籠つた滑稽の極致

……女が越して来てから
毎日の様に女の妹を玄關
へ迎へに寄越すには困つ
た。母親は勿論家の妹迄
がその爲に氣付いたらし
く予に對する素振りも妙
だ。小ましくくれた下女
がさりげなく取替ふやう
な顔をして「若旦那様、
あのいつもの女の子が參
りまして……」と取次ぐ
その白々しさを張り飛
ばしてやり度く思ふ。

四六判箱入美本
定價五十葉挿入
郵送料金八二圓
錢



堂々天下を壓する大雄辯

鶴見祐輔氏

大講演集

最新刊

四六判クローズ函入洋装寫眞數葉
定價金貳圓貳拾錢 送料金十二錢

目次の一

- ▼世界の中心はロンドンより何他へ
- ▼急變し易き米國の國民性
- ▼米國勞動運動と英國勞動黨
- ▼世界的勢力たるウエルスの作品と人物
- ▼ウイソンの生涯を憶ふ
- ▼猶太人獨逸人排斥の原因を論じて世界に於ける排日感情の擡頭に及ぶ

思想家にして、雄辯家たる新
人鶴見氏が歐米外遊中遙に故
國を偲び、憂國の至情より一
片歌々の志黙するに忍びず、
多年の蘊蓄を傾注して母國將
來の大問題を縦横に論議せし
經世の大文字である。

東京本郷 大日本雄辯會發行

法學博士 上杉慎吉先生著

日米衝突の必至と

國民の覺悟

最新刊

四六判百七十餘頁
定價八十錢 送料四錢

東京本郷 大日本雄辯會發行

記せよ前古未曾有の屈辱と
彼の恐るべき日本征服の野心
讀め!! 此憂國の大文字を

「…斯の日不肖は憤激と云ふよりも寧ろ悲痛なる感慨
胸に迫りて、國民大會に出かける心持にもならず、刻
々迫り來て免ることの出來ぬ日本國民の運命を思ひ、
報國の責は重けれども渺たる一身の知慮腕力の足らざ
るを嘆くばかり…最早之を避くべきに非ずと斷乎決
心し、筆を執りて云々」と著者が敢然起つて國民に一
大警告を與へんとするもの、一讀何人も鬱勃たる敵愾
の情に堪へないであらう。

人肉の市

獨逸 エリザベート・シエーエン 女史原著
 ▼高島華宵畫伯裝幀並畫
窪田十一先生譯
 ▼四六版妖艶挿畫六枚
 ▼定價一圓六十錢稅八錢

◎獨逸前皇帝カイゼルが非常に感激し、
 國內に普及出版を命じた名著！ 原名を
 「世紀の耻辱、白き女奴隸」と稱し世界
 の讀書界を風靡し盡す……

◆戀愛讀物とし將又探偵讀物とし世界隨一！◆

急遽九百廿五版

本書の内容 花を欺く美少女が大
 誘拐團の毒手に陥つて不知不識の中に墮
 落の淵に沈み行く怖ろしい運命を中心に
 聞くも悲惨な女子賣買の怪事實、少女と
 貴公子の哀切な戀、悪魔團の罪業、巴里
 紅街歡樂境の裏面、土耳其迷宮殿の秘
 密、其の他前代未聞の奇怪事件を暴露し
 た空前の怪著である。全世界を通じてそ
 の有する讀者は數千萬と稱せられ、本邦
 に於ても忽ち八百八十版といふ空前の賣
 行を示してゐる。譯文は極めて流暢、本
 書こそは萬人必讀の快著、讀まざるは大
 いなる恥辱と云ふべきであらう。

奇略縱橫熱血男兒大成功傳

實業界三菱王國

大瀧鞍馬先生著

蓋世の快男兒岩崎彌太郎、彼は徹頭徹尾剛復無鐵砲であつた。
 一度大小を捨て、實業に志すや、傍若無人の辣腕奇略縱橫の鬼
 才を揮つて常に我財界に狂瀾怒濤を湧躍せしめ、其間政府の
 諸大官を籠絡して一舉數十萬の巨財を得たるが如き、松源樓
 上黒田清隆との格闘、さては京都祇園の名妓お雄の容色に溺
 れ、大刀を揮つて戀敵井上馨と死を決するが如き、豪膽深謀に
 して直情逕行なりし彼の面目は躍如として本書全篇を彩る。
 正に本書は岩崎彌太郎傳として無限の興味を有するのみなら
 ず、明治大正に於ける財界政界裏面史として亦空前の快著。

忽六版 四六判洋裝函入美本發行所
 定價一圓七十錢送料八錢 大日本雄辯會

- 本書目次の一部
- ▼三菱王國の建設者
 - ▼富田屋樓上大紛擾
 - ▼伊州丸債金の行方
 - ▼富貴權お倉藏弄さる
 - ▼彌太郎と大隈の密談
 - ▼人心收獲の怪手腕
 - ▼火のやうな前島密の一喝
 - ▼一攫千金の秘略
 - ▼生死の境で打つ大芝居

奥野他見男先生著 (大好評忽ち六十版)

君は燃えたり火の如く

傑作揃ひ

内容目次

- 雲雀よ、青空よ、
- 君は燃えたり、
- 東京驛から、
- 或日銀座で、
- 波のまゝ、
- 嫁あらば婿あらば

愛せる二人は嬉しかった。彼等は晝に待たせ夕べを待ち、夕に酔ふた。その騒ぎの美しさ抱けるもの、暖かさ……



著者は名にし負ふ天下の他見男さんなり、その筆は滑稽にして品あり、軽快にして諷刺に富む。魂を溶かす様な戀とお、お隣を宙返りする様な滑稽を織り交せて一讀恍惚たるしめ、再讀する所に笑の弾丸を爆發せしむ。評判素晴らしく忽ちにして五十二版出来！大方の人々よ此の樂園に來つて甘き戀に酔へ！愉快な笑を樂しめ！

四六判箱入り極美本
定價金二圓(郵税十錢)

532
19

終